



079100-000-3

特19-538

作文秘訣

八木 定太郎/編

M30.11

DAC-3018



204
109



(流儀金 登)

小田一 愛 卿

同 名 著 者 相 を 論 史 時 頃 頃 由 年



(渡邊金秋筆)

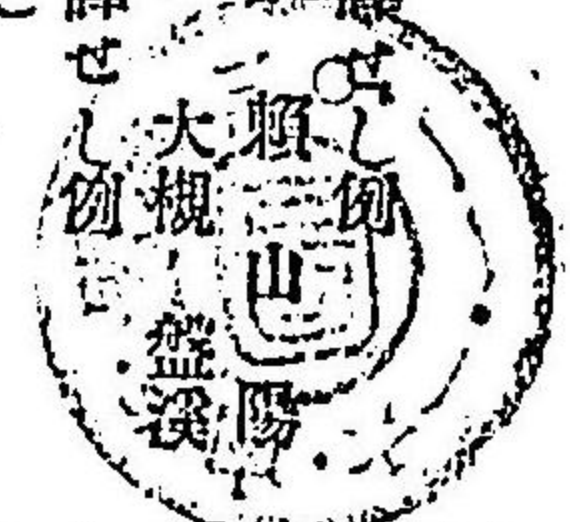
小川一真製

賴山陽幼時史論を得て喜ぶ圖

作文秘訣目次

第一章	文章の効益及び本書を編む目的	一頁
第二章	今日の文章	三頁
第三章	各體の由來と其批評 岩代國保原なる菊川和乎が七十の賀に歌よみて書りし詞 冬季の樂 詩料略論 源氏物語 加納殿の密書、御覽所の急使 獨立者の用心 故郷の快樂 蜘蛛 合の少年の文體 少年の撰び取るべき文體 文體の標準と軌範 文典に則るべきと 學識の必要 文題を撰ぶと 運筆を心のまゝにすべきと 放胆と小心とのと	七頁 七頁 十頁 十三頁 十五頁 十七頁 十八頁 二十一頁 二十七頁 二十九頁 三十二頁 三十五頁 三十八頁 四十頁 四十三頁 四十五頁 五十二頁 五十五頁

第十二章	譯文のと	五十七頁
第十三章	折中文を漢文に譯せし例 又例 漢文を折中文に譯せし例 作例を暗誦すべし	五十八頁 六十頁 六十四頁 六十七頁
第十四章	剽竊の害	七十二頁
第十五章	分量を測るべきと	七十四頁
第十六章	筆鋒及び抄寫の益	七十六頁
第十七章	一篇の仕組のと	七十九頁
第十八章	段落のと	八十頁
第十九章	道徳を以て文の精神と爲すべきと	八十二頁
第二十章	道理確なるべきと	八十四頁
第二十一章	意義の明瞭完全なるべきと	八十五頁
第二十二章	文辭を撰擇すべきと	八十七頁
第二十三章	文語を引用する時の注意	八十八頁
第二十四章	行文平易なるべきと	九十頁
第二十五章	文勢雄健のと	九十一頁
第二十六章	文章の雅馴なるべきと	九十三頁
第二十七章	客説法のと	九十四頁
第二十八章	題によりて執筆の加減あるべきと	九十五頁
第二十九章	讀む者の感情を害すべからざるべし	九十六頁
第三十章	愛を割くべきと	九十七頁



作文秘訣目次

次

(一)

第卅一章 變化のそ	百 頁
第卅二章 改竄及び草稿の清書のと	百三 頁
第卅三章 先人の文話	百五 頁

作文は讀書にある事を論ず

室鳩巢

百六頁

文章の盛衰を論ず

皆川 淇園

百十一頁

文章の爲に書の讀方を論ず

皆川 淇園

百十四頁

附録目次

填字	百二十五頁
用語集	百三十頁
添削	百三十四頁
對句	百三十八頁
假字の本字	百四十二頁
文學瑣談	百四十六頁
填字の答	百五十頁
誠に學徒に示す	百五十二頁

總目次終

● 賴山陽

(口繪の解)

賴山陽は、幼より天授の才をあらはせり。年甫めて六才の時、母に天はいかなる物ぞと問ひけるに、天はめぐりて止まらざるものなれば此の如しと答へしを聞き俄に庭に下りて天を仰ぎフシギなるかなと嘆じて泣くと半時ばかりなりしとぞ。八九才のころより軍書本をよくむを好みて、眠るとを打ち忘れ、十三の時、詩を作て江戸にある文士によせ、當時の大家柴栗山にゲキシヨウせられたり。十四五才より小學近思錄の類は悉くアンシヨウセリ。ある日虫ぼしにて東坡の史論を見、天地の間に、かゝるよき文章あるべきかと、これより力の文章に盡し、殊に史學に名をあげたり。

作文秘訣。

東京 北隆館編輯。

第一章

文章の効益及び本書を編む目的

前人の嘉言善行を記して、後人を獎勵奮起せしむるを得るは文章の力に依るなり。商家にて數千里外の客と貿易買賣するを得るも文章の力に依るなり。國家の政法も、偉大なる發明も文章の力に依りて始めて世に存す。特に子は遠く出で、學窓にあり、父母は朝夕用を待りて成業を待つ。此時に方り、遊子が一封の信書は、何程兩親の情を慰むべからむ。真率なる文章は、殆ど相面晤するの想あるべし。これたゞ、其効力の一斑を言ふものにして、讀者の熟知する所なれば、多言を要せず。

然り、文章は實に貴重なものにて、讀む者をして、己の見聞せしむ、或は感激したること同一なる感覺を受けしむるものにして、他人を同化する力あり。否、他人を同

化する力なきは、文章に非ざるなり。

詩歌の、人を感染する如く、文章も亦人を感染するものなれば、同じく之を美術中の一となせり。既に美術中のものなれば、作者は、純潔純美の心にて執筆せざるべからず。思へば思ふは難事なり。唯、誠實なる者のみ勝を取る。

かゝる大効あるが爲めに、今の少年の、作文に熱心なるは、眞に驚くべきものにして、少しく少年の雑誌にても讀む程の學力ある者は、先づ文を作らざるをなく、文を作れば、之を投書して世の批評を求めざるをなし。故に、少年の雑誌にて、作文投書を載せざるものは絶て無き程なり。亦盛なりと謂ふべし。

少國民に、毎號數十篇の投書を掲ぐ。悪しき點は、其時々指摘し、善き點は、亦之を稱美し、其他作文の百事につき、示教するを勉む。然れども、系統を立てて講説するに能はず、又、同一の事を二回も三回も説かざるべからざるをあり、勞多くして効少し。よりにて、作文叢書の名にて、連月刊行し、文例、用字、作法、注意等に關し、

少國民讀者に教へんとす。本篇は、作法のみに關して、平生の持論を述べし。作文のとは、一朝一夕にして、一足飛びに上達すべき業に非ざれば、本篇にて其作法を悟りたる上は、更に二篇三篇に掲ぐる所を愛讀し、研究の効を積むべし。順序を踏まずして、直に文章家と成らんと欲する者は、本篇を讀みても益なきを故に、かゝる看官に讀まるゝを願はざるなり。

第二章 今日之文章

若しこゝに外國人ありて、予輩に向ひ、貴國今日之文章は、各體あるやうに見受けらるゝが、何れを貴國之文體とすべきやと問ふ者あらば、不幸にして、予輩は之に即答するに能はざるなり。其故如何と云ふに、我國今日之文體は、各人勝手に、思ふやうに綴るものにして、別に眞の國文と稱すべきものなしと、答ふるには好まざればなり。

世界各国ともに、各々自國の言語文章ありて、其國の特色を有し、獨立國たる面目を保てり。然るに、我國今日の文章は、亂雜にして種類多く、何れを指して國文と稱すべきやに苦む。つまり、一國を通じて統一したる文體なきなり。萬世一系の聖天子を戴く大日本國にして、一國を代表すべき文體なく、よし有りとするも、上下四民の間に行はれずとすれば、實に歎すべきの至りならずや。

今試みに、我國目下の文體につき、其重なる者を擧ぐるも、尙左の數種あり。

(イ) 漢文。

これは、支那の文章と同體にて、墓碑銘等の類、少數の間に行はるゝに過ぎずして、日を追ひて衰ふる様なり。つまり、漢學を深く修むる者なく、随つて、漢文を解する者と漢文を作る者との數少く、僅に老漢學者の手に成るに止る。

(ロ) 擬古和文。

これは、和學者の間に行はる。源氏物語等を模範として、勉めて古語を用ひ、聞き馴れぬ節多し。

(ハ) 漢文直譯體。

これは、四書文章軌範等を讀む聲の如くに、漢文に捨てがなを加へ眞直に書き下したる體にて、官報法令より、新聞紙の社説、小學生徒の作文類に至るまで、此の文體に屬す。行はるゝ區域甚だ廣し。

(ニ) 折中體。

又、雅俗混合體、又は通俗體といふを得べし。これは、直譯體と和文體とを混和したるものゝ中より、漢語和語の六ヶしきを除去し、俗語を以て之に代へたる體にて、新聞紙の雜報は多くこれなり。これは、洋書を譯讀する聲に近づけて書き下せる體にて、洋書は讀むが、漢學國學の力の乏しき人の多く書く所なり。

(ヘ) 言文一致體。

又談話體といふ。これは、談話を速記したると同じき一體にて、會議の速記録、小説、小説中の兩人以上の對話の點などに書かる。手紙の文の一體にて、和に非ず漢に非ず、一種の體を成せり。

(ト) 書翰文體。

細かに擧ぐれば尙ありと雖も、先づ右の七種を其重なるものとす。一例をあげて短き章句を示さば、

- (イ) 明治丁酉十月三日、東海道小山驛、土砂車六輛墜落谿谷、三十餘名死傷、
- (ロ) ひんがしの道小山の馬屋にて、六つの蒸しけ車、谷底に落ち入り侍る。
- (ハ) 東海道小山驛、土砂車六輛谿谷に墜落し、死傷三十餘名あり。
- (ニ) 東海道小山驛にて、土車六輛谷底に落ち、死傷の者三十餘人あり。
- (ホ) 小山驛にて、三十人の死傷を出す、土砂車六輛谷底に向つて落ちたるに依て。
- (ヘ) 小山驛で、土運車六輛谷底に落ち、死んだ者傷ついた者が三十餘人だとす。

(ト) 東海道小山驛にて土運車六輛谷底へ墜落仕り、死傷三十餘人有之候。僅か一行つゝを限りて例したるなれば、其文體を現はすとは出来ざれども、面影の一斑は右にて知らるべし。福地源一郎氏、曾て編者に語りしとあり。北米合衆國は自

由を貴ぶ國なれども、本邦の文章の自由は又合衆國の自由の上にも出づべし。英國米國等の文章は、一字の置き方悪しくとも、文には成らざるなれども、本邦のは、百人百色に勝手自由で書きて、差支なし、誠に自由の國なるかなど。眞に、此の如く種々様々に文體の分れ、標準手本とすべきものなきは、諸外國にはなきことなるべし。故に編者は言はんとす。我國今日の文體は、瓦解離離して、統一を欠き、恰も無政府の國家の如しと。

第三章 各體の由來と其批評

上章に於て、各體の文章あることを述べたれば、こゝには、其各體の由來を述べ、併せて之を批評せんとす。

(イ) 漢文。我國の人の漢文を作りたるは、凡そ一千年前よりのもなれども、最も巧みにして見るべき作を出せるは、二百年後のとなり。支那の四書五經二十一史、唐

宋諸大家の作を手本として作れるものなり。儒教を盛にせんとするには、勢ひ漢文をも盛んにせざるべからざるは、自然の理なれども、もと、支那の文体なれば、我が國人の性情風俗言語に、適合せざるが多く、又、漢文を作るまでには、漢學の素養容易ならず。これ明治以來は、俄に其勢力を失ひ、今は唯、明治以前の漢學者の手に成るを見るのみにして、其數甚だ少き所以なり。まして、漢文にては、日用の帳簿を付けるとも出來ず、新聞雜誌の雜報を漢文にて書きたらば、よく讀む者も少く、博物書算術書は、漢文ならざる方が却て精密詳細に書くことを得るなれば、殆んど無用の如き姿とはなれり。博物館内の揭示札に「許ニ目視ニ不許ニ動亂」と書くよりは、「品物に手を觸るゝ勿れ」と書くが、却て効用多ければなり。又、漢文は、たとひ一部分に必要ありとするも、本書は、中學小學の學生のために述ぶるものなれば、以下之を説かず。

(ロ) 和文。八九百年前より盛に行はれたる、我國固有の文章なり。一時甚だ衰へし

が、近古一百年ほど前より、再び興り、明治の初めに又衰へて、五七年前よりやゝ勢ひつきたれども、さほは廣くは行はれず。一體にいへば、漢學を好む者は漢に僻し、和學を好むものは和に僻し、洋學を好む者は洋に僻するは、免るべからざることなれども、和文を作る和學者には、この僻一層甚しく、八九百年前と今日とは、我が國人の言語も風俗も甚しく違ふにも拘はらず、今日の文體を、無理に八九百年前の文體に引き直さんと勉むるものゝ如し。故に、其用語には、雅語と稱する古言多く、一度よみ聞かせられたる斗りにては、意義を知る能はざる文章多く、又冗長にして、普通の用を成さざるは、尙漢文と同じ。和文にも、一種の長所ありて、幽妙なる感情などを書くには、適當の文體なれども、雄大なるとは書き得べからず。其証には、征清役の、平壤の戰、黃海の戰など、雄壯偉大なる事實を、和文にて明かに其景と情とを記述したる者ありや。編者のこれまで見たる所にては、一も取る處なきなり。

次の一篇は、現今有名の和學者本居翁の作なり。歌に書き添へたる序詞なれば、普通の文章と同一に見んは、固より不當なれども、到底普通一般の文體と爲すに足らざるを知るには餘あるべし。

岩代國保原なる菊田和平が七十の賀に

歌よみて書をへつる詞

本居 豊 頌。

紀伊國の岩代の松は、有間皇子の常ならぬ故事あれど、それには引かへて、東なる岩代の保原なる菊田松翁は、ことし七十年にみてるよはひを、菅の根の長さ春日まぢ得て、ことほぎの宴すと告げをこせつるまゝに、おのれもよことをのべむとす。翁ははやくよりわが父の翁に従ひて、年ころ學の道の八十隈をわけて、言葉の林に花の五百枝をかざし、またつねに、百八十の教子をみちびきいそしめるが、ことに養蠶のわざにも精しきは、なほその糸のうちはへて、長さ齡をたもつべさしるし、草木の花のうつし繪にすぐれたるは、そのやちぐさ

のかぎりなく、よはひをのべに榮ゆべきゆるよしなるべし。家の名は、七重八重千世の香めでたきくさはひと、千町五百しろかぎりなき足穂の小田とをつらねたゞへ、家の内和み平らけきが上に、葉がへせぬ松の翁とさへ名におひつゝさまはふ文字の福島の縣、かきはとさきはの岩代の國にすめるは、八百萬の神たもも、かねて翁がために所を得しめ賜へる深き契りあるとならん。かればいにしへ人は、稀なりといひけん七十年の齡も、翁がためには、菊ならば此春の日に生そめたる若苗の如く、松ならばはつねの小松の若緑にて、奥つ御年の長五百秋の末の榮は、いと遙に遠しとぞいはまじ。かくてことほぎの歌は、物によせておのがじし意のまゝなりとさけば、鶴の繪かける扇にそへて、未ひろくさかゆる家の春風に、千世をうたひて鶴もまふなり。また、松竹梅のわやあるふくさにそへて、ふくさを物名に はるかすみ、つしめどあまるうれしさに、にはふ草木の花もるむらん。

短冊にそへて、たにさくをものゝ名に、

春を経て、いろかわらたにさく花は、こと葉の園に君ぞをるべき。

かゝる文章は、古文學の一種として、専門家の作り學ぶは害なしといへども、普通の學生が、普通の作文を學ばんとする手本には如何に。菅の根の長き春ひまぢり得てことほきのうたげすと、つげをこせつるまゝに」の調子にては、長さ三尺、杵頭の如き砲彈の、空にうなりて飛び交る様などは、能く寫し得べしとは思はれず。

(八) 漢文直譯體 近古に始り、明治以後に至りて大に行はれ、今日にては、各體の文章 中最も廣く行はる。先年下し賜へる教育勅語の如きは、畏れ多くも亦此の體なり。勅語文は、神聖なる者なれば、之を除き、世間の直譯體につきて言はんにもと、日本の文典に暗き漢學者が、漢文の讀み癖せ通りに書き成したるなれば、文典の誤り甚だ多く、且つ、近來は、文章を簡潔にする心にや、助辭を畧す者多く、句讀點なければ讀み得ざる文もあり。往きしと來りしと明ならざるあり、又は

過去現在未來を書き分けざるあり。特に、六ヶしき文字を拾ひ集め、文選を見るが如く思はしむる種の文もあり。

小區別の例を、一々擧げんは煩はしければ、政教社の仲間の合作なる、小絃集より、短篇三章を左に出す。或は奇屈の極端を表して餘あるべしと信ず。

冬季の樂 小絃集。

大呂十二月、雪漸く飛び雪初めて下る。木葉蕭條、万物正に沈靜に歸す。是れ講學の好季節なり。寒燈一穗の下に青史を繙き、今古の成敗興亡を探討するも可、爐邊に梧拙を燃き年少の子弟と相圍みて談論するも可、人心を鍛鍊し教育する者、復た冬季より宜しきはなし。人は冬季の長久なるを厭ふ、長久なる何すれぞ厭はん。是れ即ち講學の季節の長久なるものなればなり。人心を鍛鍊し教育する好季節の長久なるものなればなり。我常に冬季の樂を懷ふ、人は冬景の慘澹を言ふ、而かも霜氣八十餘州に徹透し、歐米諸邦に絶えて看得

ざる公孫樹は黄ばみ盡して亭々たる幹技上に二三葉を餘し、時に鴻雁は北極地方に餌食の缺乏するを以て、愈黨派を團結し、益競ひて寒雲を渡り、餌食の饒多なる日本に南來して、敗蘆衰荻の間に下る。田間の案山子半ば敗れて、鴉おとしの弓矢は唯だ殘留せる一二の柿を衛るのみ。人は冬景の慘澹を曰ふ。我は冬景の清瘦を酷愛す。

雪既に下るや、天には淡墨色の同雲連り、地は混范一白、其間松樹檜樹の聳立して、皎光翠色相點綴する處、一蕊の天風時に氷海より剪りて來る。我は冬景の豪健を樂む。

人は曰ふ、冬季に花なしと。焉んぞ然らんや。木犀科にはひらぎあり、石蒜科には水仙あり、蘭科には君子蘭あり、菊科には寒菊あり、五加科には金剛纂あり、薔薇科には薔薇あり、枇杷あり、冬櫻あり、寒梅の冬骨稜々として來るあり。特に厚皮香科の山茶、茶梅の如き、固と半熱帶植物なるも、日本に在りて

は初冬より開花し、積雪層氷の中と雖も依然たり。我は最も冬の花の幽玄なるを好む。

冬季の樂や此の如く多し。是れ籠城の時にあらず、是れこたつに蟄居するの時にあらず、是れ飲酒に耽けるの時にあらず、是れ絃聲舞影の間に在る時にあらず。

詩料

千古詩人絶好の材料、多くは是れ當人には極不快極悽慘の事。されども、猶ほかの天才者の爲に無限の材料を供給して、自ら悔いざる者あらんか。亦是れ吾が徒。

警鐘

星白うして北風勁し。警鐘半夜に響く。滿城人耳を聳つ。仍ほ是れ當年の江戸の花を憶ひ起す種とやならん。竭來白日、揚々車馬の徒、夜陰四知を欺く者多

しと傳ふ。須らく警鐘を續け打にして、夜々以て日に達せよ。鏗爾たり錚乎たり、少しく渠儂が頂門を破針するに足らんか。

日本國の文章としては、助字を誤り助字を缺き、甚だ不完全なるに非ずや。最初の六行に、編者の挿入したる小字を一覽せよ。結構其他章句の點は別問題としても「大呂十二月電漸く飛び雪初めて下る木葉蕭條万物正に沈靜に歸す」の一行の如きは殆ど文を成さざるなり。以下は一々批評せざるも、讀者は容易に破格の文字なることを覺るべし。此種の文章は、口調の、漢詩を譯讀する如き音調あるために、一部の書生の間には愛せらるゝとあるべきも、國文とするの價値なしとせざるを得ざるなり。

(二) 折中體。遠く七百年前に始り、源平盛衰記、太平記等、戰記物語の文を初とし以下其數甚だ多く、徳川氏の代に入りて、老熟渾化の一新面目を開き、徂徠の「なるべし」白石の「折りたく柴の記」益軒の「大和俗訓」淇園の「雲萍雜志」蜀山の「一話

一言」常山の「常山紀談」等著名なり。漢語を用ひるも、其音を聞きたるまゝにて其意義の了解せらるゝ程の漢語、和語を用ひるも、久しく人耳に入り馴れたる和語、俗語を用ひるも馬丁ころつきの用語に拘らず、假字つかひも餘り無理ならず、つまり、全文を聞きて、直に其意義を了解する程の文なり。

今日の文章家中、折中文の作家は、依田福地福澤三氏を推して三傑と爲さんとす。三氏各特色を異にすれども、其奇癖なく、老健篤實にして意義明に、折中文の本体を具ふるは一なり。左に例を示す。

源氏物語

依田學海。

昔より此書を愛して讀むもの幾ばくぞや。又註釋を物するもの、實に牛に汗し楸に充つ。然れども、多くは一章一句の妙を説き、或は言語の解難さふしを註するに過ぎず。唯萩原廣道の評釋のみは、眞の評釋の實はありける。惜むべし若紫の卷に至りて筆を止めしかば、全部の妙を知るに及ばず。但卷首の總論に

て、大体は知られたり。余は幼よりこれを讀むに、讀むたき所は大方湖月抄につきて之を解し、それにも解しかぬるは、これをさしをくのみ。大体を解し得れば足れりとす。人情の曲折を寫すに、高尚にして迂遠ならず、痴情の甚しき、尋常の文に絶ていひ難き所を、少しも厭ふとなく憚る所なく寫し出せり。此等の妙處は、此書の獨得る所にして、他の書に類なきものなり。なほ此事につき、世の評論と見を異にする多ければ、他日詳に之をいふべし。これ勿々の間に成れる小品文なれども、流暢渾厚にして誠意充實するを見るに足れり。翁常に、白石の藩翰譜に推服し、白石の文といへば、斷篇零簡も寫し取りて愛讀せり。淵源する所、窺ひ難からざるなり。

加納殿の密書、御臺所の急使(宇都宮天井 考中の一節)

福地源一郎。

此に加納殿の奥平忠昌は、世間の浮説を聞き、こは安からぬ事なり、早く告げ奉ら

ではあるべきとて、自ら書狀細々と認め、本多上野介は將軍家を失ひ奉り、天下を志すとの逆心を懷き、新に御湯殿をしつらひ、其下に劍を並べ植ゑ、四方の板を羽目にして、天井は繩にて釣り置き、相圖の時に天井も羽目も一度に落る様に拵へ、其中に入れ置たる大石にて、將軍家を壓に打たせて害し奉るべき仕掛を爲し、又御寢殿の床を高く造り、其下を諸人自在に往來し得る様に構へ、又此ごろ京よりあまた鐵砲を薦包みになして下し、殊に此秘密の洩るゝ事を恐れ、根來法印百人を一日が中に悉く誅したり。是等の事尤も不審なり、御用意なくては何なる珍事を引出さんも知れ申さず。と書し、其頃奥平家に召預けられたる幕士堀伊賀守利重に持たせて、急ぎ江戸に走らせ、御臺所に注進せしめたり。御實記細註、君臣言行錄、此消息を得て御臺所は大に驚かせ給ひ、急ぎ自ら書を裁し、上野介正純謀叛云々の事をば、加納殿より告られたる儘に秀忠へ報道し給ひたり。

將軍秀忠は、斯る事とは夢知り給はず、四月十九日豫定の如く御下山ありて、今夜は宇都宮御旅館へと還り赴かせ給ふ所に、江戸より急使來りて御臺所の消息を捧げたりければ、驚愕一方ならず、雜説頗る紛々たり。是に依て、表面は御臺所御不例御大切の急報ありと言觸し、宇都宮を打越て、其夜は直に壬生に泊らせ、途中御急行ありて、同廿日江戸城へ還御なる。尤も井上主計頭正就を宇都宮へ遣はされ、御旅館の状を視察せしめられたり。是は主計頭が視察報告の趣に由りては、正純が罪正さんが爲なり。然るに、主計頭が返り報する所に據れば、正純が造營したる寢殿の遣戸毎に、又開き戸一ツツを設けたるは地震の砌り、遣戸の明かざらん時には、此開戸より出させ給ふべき爲に設けたるなり。斯る構造は世間に未だ無ければ、軍兵亂入の爲の設なりと、浮説を傳へたるもの歟。次に御湯殿の天井、板敷羽目など陥落する様に工み、其下に劍を植ゑ、蒺藜を並べたるなど云へる事は、痕跡も無き事なりと云へり。(以下略)

依田翁の文と、何れを兄とし何れを弟とせん。眞に、所謂伯仲の間に在るものなり。たゞ、依田翁は、特に叙事に長じ、福知翁は論文に長ずるが如し。

獨立者の用心

福澤諭吉。

一身一家の獨立とは、西洋文明の風に從へば、誠に珍らしからぬ事にして、尋常普通人間の勤むべき勤なれども、扱新開國たる日本に於ては、何か耳新らしく聞えて、人に説くを易からず。蓋し我古來の習慣に於て、人と人との交際近きに過ぎ、濃なるに過ぎ、自然の勢、遂に依頼す可からざるに依頼せんとするの風を存するが故ならん。亦是れ儒教の餘毒と云ふも可なり。此相互依頼の空氣中に居て、獨立を説くの難きは、尙ほ忍ぶべしとするも、其獨立論者が、動もすれば、世間に誤解せられて、忌ましく思はれ、憎くらしく見ゆるこそ、氣の毒なる次第なれ。其事情の大概を述べんに、

人生獨立の第一要は、自力自活苟も他人の厄介たるを許さず、一切萬事自分の

責任を以て生活するが故に、私有財産を守ること固きのみならず、自家の私有を重んずると同時に、他の私有をも犯さず、例へば金の必要あればとて、吃と返濟の目的あるに非ざれば、借用するとなし。若し萬一も之を借用して、返濟不如意のともあらんか、金主より催促の有無に拘はらず、其時の苦痛は、自らを以て背後より追はるゝが如くなる可し、在昔木下藤吉は、主人松下嘉平治の金を持逃げして、立身の後大に之に酬ひたりとの談あれども、是れは亂世英雄の事にして、天下後人の手本に非ず。今の獨立士人は、自から額に汗して自から食ひ、有餘を積み不足を忍び、他に對して一毫も取らず、一毫も與へざるの主義なれば、外面より窺へば、其舉動溢くして華やかならず、時としては利に偏するの俗評なきを得ず。

又獨立者の言行は、多くは主觀より生じて客觀に誘はるゝと少なく、即ち言行の自由なるものなるが故に、自分には他人を傷くるの意なきにも拘はらず、動

もすれば偶然に其人の弱點を犯すとあり。自から其感情を害して忌ましく思はるゝも是非なき次第なり。然かのみならず、其實獨立と決定したる上は、單に財物に就て人の助力を求めざるのみならず、居家處世の事に關して、一言一行も自ら守りて鄙醜を犯さず、用心堅固にして陰に陽に讒を示さざるものなれば、是亦俗眼に映じて甚だ面白からず、善を好み惡を惡むの人生の本心なりと云ふも、人情世界は必ずしも然るを得ず。東隣の主人品行方正にして萬般の施設都て愚ならず、之に接して何事も條理は能く分れども、其人は常に平氣なるが如くにして、且つ他人に對して、一身上の私を語ることも少なければ、果して得意なるや失意なるや、容易に測り知る可らず。其敵意なきは明白なれども、何分にも交際上武骨にして興味少しと云ふに反して、西隣の男子は、舉動活潑にして禮儀も正しく、一見君子の如くなれども、其内實を探れば、家政治まらずして常に金策に窮するのみならず、其身の品行も亦法外に逸して、言ふ可らざる

るの醜を犯し、之を匿して匿すを得ざるの窮境に陥れば、則ち人に依頼して萬般を懺悔し、彼の秘密の口留め、此一件の始末、平に御頼み申すとて、平身低頭すること毎度例の如し。要するに此男は、外面こそ君子なれ、裡面は鄙醜の穴だらけにして、獨立を去ること遠き者なり。扱此東西兩隣の人を並べて、俗世界の交際に、孰れか交際宜しと尋れば、武骨なるよりも頭の低き者こそ人に容らるゝの常なれ。世人は、此穴だらけの穴を知らざるに非ざれども、其穴の多きは即ち其人の興みし易き證據なれば、恰も之を捕虜として内心に輕蔑しながら、遠慮なく附合ひす可し。況んや鄙醜と鄙醜との交際に於ておや。其醜いよく醜にして、交りはいよく堅し。獨立士人が八方に忌まれ憚かられて獨り自ら超然たらんとするは、易き業に非ざるを知るべし。

左れば、世の學者士君子にして、獨立以て身を終らんと決定したる者は、自から其身を守ること嚴正なる可きは、今更ら言ふまでもなきことなれども、其自

から守ると同時に、人に交るの法は大に趣を異にして、寛仁大度を以て自ら居り、胸中の濶きこと河海の如くにして、賤丈夫も來れ輕薄兒も來れ、塵も埃も一切厭はず、苟も直接に我身を害せざる者は、都て善人なりとして、之を容れて之を親しみ、其改心悔悟を促すの道は、徒に口に喋々せずして、我身心の眞面目を示し、他をして獨り自から發明せしむるに在るのみ。僅に獨立の一斑を知り得て忽ち得意を催はし、我こそ天下獨立の人なりと稱して周圍を蔑視し、苟も己に異なる者を嫌ひ憎んで、却て自身の交際を狭くし、却て人に忌まれ憎まれて不平に終るが如きは、獨立の君子に非ずして、其實は小人の偏屈なる者にこそあれ。獨立の大主義は、學者安心の玉寶なり。寶物は大切に深かく秘藏す可し。眞宗の教に、念佛行者と人に悟らるゝ勿れと云ふことあり。余も亦此教に倣ひ、天下後進の學者が。漫に口にのみ獨立を言はずして、深く心の中に之を信じ、黙して之を實行上に現はさんことを願ふ者なり。

福澤翁の文は、前二氏の作に比すれば、更に俗に近し。穴だらけ、「塵も埃も一切厭はず」などの言は、此に有て彼に無し。又、一氣呵成の文なればにや、些しの假字用方の如何と思はるゝ點もあり。然れども、自説を、成るべく多数の人に見せんとする心掛けは、文辭の間に顯然にして、言々熱情あり。浮華の文を作るものゝ、知る能はざる所なるべし。殊に、譬喩を用ひるゝ適切巧妙にて、前文、借金のと、木下藤吉のと、東隣西隣の人のと、眞宗念佛のとなど、何れも、大に文意を助けて効あり。

(ホ) 翻譯體。十年以後の新しき産物なり。もとは、洋書の翻譯ものにのみ用ひられしが、近來は、少年の間にも行はる。然れども、太陽の光線を形容するに「圓く大なる物より數萬の金の針がねを引く」と書き、草葉の露を「重くして光りある水の金剛石、草の葉の端を強く引く」と書く如き例は乏しからず。洋書の語勢を借らんとして、却て不明瞭を來せるものなり。中村敬字翁の立志篇の如きは、同じく翻譯

の書なれども、かゝる不消化の點なし。

この体を書く人少からず。たとひ全く此体ならずとも、多少その臭味を帶ぶるに至りては、甚だ多し。今、湖處子といふ人の文を引て讀者に問ふとわらんとす。

故郷の快樂(前後略す) 宮崎湖處子。

二日を経て、天は晴れ雪は解け、路も亦全く乾けり。其日の晚き午后に、主人は邊りの森に獵らんとて出てければ、余も亦隨ひ往きたり。嚮に雪に隠れたりし世界は、今復り來れり。然れ共夜の晝と變はる如く、冬の景色は春の景色とは太く變はれり。余か舊知の村落は、恰も薄命の蘇武に似て、少かく去りて老ひ歸り、今は未知の境となれり。野路の草は落残りたる鬚髮の如く、灰色となりて疎らに兩の端に着き、刈残されし稻株の田圃は、鋏に充ちたる膚理の如く烟霞を剝がれし茅屋は、暴はに起る關節の如く、青葉に別れし林の觀は、坐ろに知死期の筋骨を成したり。頓て林下の徑に入れば、最後の影を、夕日は枯樹

の梢に置き、薄紅の空は、密枝の外に遠く窺かれ、嘗て蔭深かりし隠處も、日暮の暗光は野と一様なりき。鳥の巢も露はに見へ、鳥の歸りも亦晚れたり。此處を活動し得ざる風も早吹止みて、唯余等の靴音のみ傳へ響けり。彈丸は所々にして放たれ、聲毎に鳥は落ちたり。今は夕も黄昏ければ、余等は他の道より歸らんとて林を出てたり。晴れたる暮を見渡せば、利根の流を上る帆も下る帆も、甚た高く天を截れり。圖らざりき一重に見えし大帆の、互に左右に分れし間に、をり、河堤よりも堤の樹よりも、見ゆる村落よりも、猶想像すべき數多の國よりも、遙か向ひの地平線に、遠觀の富士の立てるとは。夕氣も、紅暮風も往き、今闇み初めし空の色に塗抹せられて、白く見ゆべき雪の高峰は形よく剪み、瑠璃光の雲の扇に披けにき。其が從者なる長山脈は、同様なる色を放ちて、帆の分るすまゝに延び焉、遂に又夕闇の大幕に、主人と共に包まれて、今は唯他日登るべくある余の脳裡に疊まりて、富士が有り得る美景の觀念

(チニニ)として彫られたり。

かくの如きものをも、文章と言はざるべからざるか。「少かく去りて老ひ歸り」此處を活動し得ざる風「白く見ゆべき雪の高峰は形よく剪み、瑠璃光の雲の扇に披けにき」の如きは、如何にも評すべきやうなき拙劣ならずや。拙劣も亦可なり、白く見ゆ云々の句の如きは、常識を以て解すべからざる不完全の語句なり。即ち修辭達意の目的を達し得ざるものにして、少國民の文林に掲ぐる投書に劣ると甚しき作といふべし。

(八) 言文一致體。 徳川時代の小説に始り、今日も、小説に多し。現況を詳に言ひ表はす一種の長所はあれども、何となく卑しく、且つ冗長に流れ易し。故に、對話に限りて一致体を用ひるは、やゝ望みあれども、公私百般の文書をこの體にて書かんとは望みなしとす

蝴蝶

(前後略)

山田美妙。

海は一面軍船を床として、遠見の果てが浪にゆられて、高低さへ爲なければ、水があるとは思はれません。雨のやうに箭が降注いたのは、戦争がやゝ熾に爲つた頃(また運命がいくらか頼もしかつた内)だけで、今はその雨も敵の凱歌と共にあがり掛つて、たゞ手近な太刀討と組討と雜倒しがあちこちに始まるばかり。折れて水に陥つた箭の死骸、それも討死した士卒の軀と共に幾つとなく簇がつて浪に弄ばれて居る体たらく、さながら堰の水門に塵芥が集つたやうです。今すこし前でした、能登守が(教經)血眼になつて源氏の旗下へ飛込んだのは。蹴散らし、拂ひ倒して見る／＼敵の中へ割つて入つたうしろ姿のいさましさを、かなぐり捨てた、鎧の袖の切れ目の糸は微かな波を空中に打つて、亂髪に勢を添へて居て、そして之が亂入するや否や、敵にはかに噪ぎ立つて、主人九郎(義經)が危いと思つたか、やゝ進んだ兵の内でも、旗下へ引返したもののさへありましたが、いつかそれも静まつて更に立直る反働の力のすさまじさ、瞬に敵

は早御座船近く近寄ります。「能登守だに死にたるよ」たれ言ふとなく傳へる此聲、心細さは増すばかりです。新中納言(知盛)の顔を見るさへ涙です。泣立て譯もなく主上に(安徳帝)取継る女房どもの有様には萬夫不當、平家の柱石と聞けた新中納言の唇もわな／＼いて、着馴れた鎧の威毛にやゝ止る露の雫、それを飛沫といふだけ哀れ、たれが永別の涙で無いと言ひまじやう。知盛の今日のむねぐるしさ、わざと従容として無理に笑顔を賣るもの、其笑顔は冬野の寒菊、無情の風を待つのみです。主上に對する眼、女房どもに向ける目眦、いづれ優劣なく無念の露を宿して、否帯びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが、次第に紅く爲つて行き、いつの程にか髪の毛針を植ゑて居るやうです。この文は、言文一致体の中に、翻譯臭を加へたるものにて、句ゆるく、教經の勇猛の状などは、少しも寫し得ず。「鎧の切目の糸に微波を起す」などは、教經の爲めには、何の形容にもならざるなり。「イサマシサ」「スサマシサ」「クルシサ」などの

きは、甚だ耳に障る。知盛の髪の毛は、「針を植ゐて居る」と言へども、知盛の髪の毛は、白かりしを聞かず、五分刈りあたまなるを聞かず、形容の適せざるを笑ふべし。

(下) 書翰文體。書翰文は、其始め、支那の尺牘體を學びたる、不完全の漢文なり。七八百年前より行はれ、今日にては、追々他の文體に化し、僅に、「以手紙令啓上候」「奉三歎願一候」など、少々だけ漢文の形見を殘せり。今日にては、書翰文なりとも、一體を立ておく必要なきなれども、久しき習俗なれば、今俄に改めがたし。又、漢文直譯體にて、漢文尺牘體を書くものなきに非ざれども、これは、生意氣少年の玩弄遊戯に過ぎずして、實用を爲すほどに非ず。別冊に説くべければ、茲に例を擧げず。以上の各體中、現今の少年は、何れの體を學ぶべきか、又學ばざるべからざるか。これ本編作文法の第一着として説かざるべからざる點なるべし。

第四章 今の少年の文體

時文として擧げたる七體中、漢文は、普通文と爲すべからざるを明かなれば、之を除き、書翰文は、別冊に説くことなし、殘る五體中、少年の文體と爲すべきは何れなりやを攻究せんとす。就ては、少年の文の、現況如何を觀、然る後に決定するを順序とす。

日々輻輳する投書に就いて其比例を取れば、最も多きは「漢文直譯體」にして、之に次ぐは「折中體」なり。次は「和文」にて、「翻譯體」と「言文一致體」とは少し。

少年の文に、「漢文直譯體」の多きは何に由るか。明治維新の後、作文書類を編纂せるものは、少しく漢學だけを修めし者に多し。故に、其作例は、漢文を直譯せるものか、或は自分の作にても、漢文直譯體の文を以て、填めたり。今日、市上に流布する多くの作文書を取りて一讀すれば、其文は多く「直譯體」にて、熟字類語も文題も、漢文流のもの多きを見て知るべし。これ一つの因なり。

又、漢文は、六ヶしき文字、華やかなる熟字を使用するために、一寸少年を喜ばし

むるに足れり。少年も亦、これ等の熟字熟語を使ひ、これ等の作例によりて作れば、博識なり、學者なりとの氣持ちにて、蟻の甘きに就くが如く、天下靡然として之に趣けり。これ一つの因なり。

又、當時の小學教員は、多少漢文を読み得る者ありて、己れの好む所を生徒に教へしかば、作文といへば、漢文直譯體のものを指す如くなれり。これ一つの因なり。次に、洋學の開くるに従ひ、漢學の學び難くして徒らに歲月を費すを嘆じ、羅馬字會、假字の會、三千字會、等を興すもの相踵ぎ、痛く漢字を輕しめけるが、其反動として、國粹保存の論者も出で、文部省にても見る所あり、大に國文を獎勵せり。これより、小學中學の教科書中に、國文の入るあり、あんめれ、べけれの聲高くなり、作文も其影響を受けて、少しく従前の體を變じたり。然れども、急に一變すべからずして、折中體に趣くもの多きを致せり。これ、折中體の、直譯體に次ぎて行はるゝ一因ならん。

和文、翻譯體、一致體は、少數なればこゝに掲ぐるまでもなし。

第五章 少年の撰び取るべき文體

無政府同様の文章界に在りて、撰び取るべき文體は何を可とすべきか。文章の目的を定むる時は、この問題は直に決定するとならん。

人の、文章を作る目的は、今更之を喋々すると無用なれども、先づ、巧に己れの意志を他人に通ずると、

を、主眼とせざるべからず。若し、文章が、己れの意志を他人に通ずると能はざるときは、其目的を失ひたるものにて、文章たる直打なきなり。故に、この目的を達する文章は、

誰にも學び易く、分り易きこと、
文典に誤りなきこと、

上品にして、人之を讀むを樂むべきこと、
日常用ひ居る言葉と、成るべく離れざること、
如何なるにても、書きあらはし得べきこと、

等を元素として、化合したる文體ならざれば不可なり。五體の文章中、この目的に合ふものは何れぞや。編者は之に答ふるに、たゞ「折中體」の一を以てせんとする。
「漢文直譯體」は、漢語を多く用ひるために、其讀み聲を障子の陰にて聞くばかりにては、何のとにや分り兼ねると多し。「ケイロヤウチヤウ、一ケイ一ボ」「リカノクワウ

キクハガウサウノイロアリ、コウホノシツハタンアクノゴトシ」と、聞くとともに「徑路羊腸一憩一步」籬下の黄菊は傲霜の色あり、後圃の柿實は丹渥の如し、「の文字を見せられざる間は、何のとも知り難く、たゞひその文字を見せられたりとして、少しく漢字を習ひたる者の外は、了解せざるべし。且つ、前例の、徑路羊腸の下に「にして」の假字なき如きは、文典に合はざる句なり。故に、この體は、學ぶに易からず、日常

の言葉に離れ、他人に分り難く、文典に誤あり、通俗の文としては、適當せず。

「和文」は、日常の言葉に離れ、普通の人に解せられざるは「直譯體」に同じく、だらくと長くして、偉大勇壯なることを書くには適せず。

「翻譯體」は、西洋の語路と日本の語路の相違ありて、相合はざるのみならず、此體を書く人は、最も文典に注意せず、意に任せて書き放つ故に、文の手本とすべきものなし。

「言文一致體」は、最も實用に近き體なれども、「上品なる美の性質」を具へざる欠點あり。上品といひ美といふも、あながち、古語を用ひよといふには非ず、今日の俗語と稱する言語にても、俗語ならずして雅馴なるも多きことなるが、一致體の品位は、未だ雅馴の語のみを取らず、且つ文法に批難すべき點少からず。

此の如く、一々吟味するときは、折中體を以て最も優れる者とせざるを得ざるなり。この體は下卑に陥らずして品格あり、文典に則り得べく、日常の言葉に近く、誰にも

よく分り易く、何事をも書き得べく、漢語も和語も平易なるものは混用すべく、各種の元素を含めり、今日は勿論、今後の本邦の文章として、少しも恥づる所なし。唯、六ヶしき漢字の、俗人を驚かすべきものなく、聞き馴れざる古言の、交らざるがために、俗人は、平凡の作と思ふべけれども、文章の性質目的より言ふ時は、之を棄て、他に求むべからず。まして、平凡の作ならずして、よく我が國人に適合するをや。益軒の「女大學」の文の如きは、今日までの處にては、古今獨歩の妙文といふべし。

第六章 文體の標準と軌範

遠きに往くには近きよりし、高きに登るには卑きよりすべし。文を學ぶ者も亦、この心得なかるべからざるなり。今の風俗人情言葉は、源氏物語の出來たる時代と、異なる點多ければ、今人が、直に源氏の如き文を作らんと欲すとも、其骨折容易ならずして其効は割合に少かるべし。然るに、若し、明治より徳川氏の末に於る文を作らんに

其言語も、風俗も、人情も、甚しき相違なければ、骨折少くして効多し。故に、手近の處より學び始め、漸次遠きに及ぼすを法とす。

すでに、折中文を以て國文の體を得たるものと爲す時は、手近の折中文の中、取りて標準と爲し軌範と爲すべきは、誰の作を推すべきや。文章平易にして意義明に、奇癖なく、文典の失なく、諸要點を含める文は、誰の作にても可し。一人の文に固執して、只管摸倣するに比ぶれば、効益多し。然れども、試に一二を擧ぐれば、貝原益軒新井白石、柳澤淇園の作の如きは、毫も不可なる點を見ず。其他、甚だ多かるべきも、そは作例の卷に述ぶるとし、こゝには省く。

白石は、學は和漢を兼ね、一たび羅馬人と問答して、洋學の端を開きし程の博識多才の人なり。其胸中に畜ふる所を織り出して文章を作るとなれば、抑揚疾舒意のまゝにて、其著書藩翰譜の「本邦の史記」といふ賞賛を得しも當前のとなり。一二、文典上の誤りあるは、時世に因るとにて、白石を輕重するに足らざるなり。最も折中文の

軌範に適す。

益軒も、博學達識の大家にして、其著述書は、漢文の者少く、多くは折中文なり。

奇崛の文字を用ひて俗人の眼を眩ますを爲す、學問なき婦女子村夫に讀まるゝを主意とせる所、大家たる所以なり。老健着實にして、讀みて旨味あり。

淇園は、人の師と爲るに足る程に、十六科に通曉したる多能多藝の人にて、其文章

中、「獨り寐」雲萍雜誌」の如きは、流暢明瞭にして、しかも用語險難ならず、初學の

文範と爲すに足れり。

文の標準と軌範とを、この三家に取るに限るといふには非ず、平易にして直く、上文

の主意に適したる文ならば、誰の作にても、多く學びて其長する所を取り、自家の文

範となすべし。今は、強て唯三家を擧げたるのみ。

第七 章 文典に則るべきこと

第七章 文典に則るべきこと

日本の文章には、自ら日本の文章の規則あり。規則に據りて巧みに組み立てたるを、

眞の文章とはいふなり。諸外國の文も亦然り。故に、日本の文章にて、日本の文典に

違ふ者は、日本の文章といふを得ざるなり。何程綺麗なる文字を使ひ、數千萬言を

連ぬども、文典に適はざる文章は、唯、文字を書き並べたるのみのものと云ふべし。

文典とはてにをばの使ひ方、動詞助動詞形容詞等の使ひ方より、掛り結びのとなど、

一定の規則のあるものをいふ。この規則のために、過去のとか現在のとかを區別され、

句の切るゝと否とを區別され、我と彼とを區別され、文章始めて明瞭となるべし。委

しくは、文典書に就きて見るべし。

次手なれば、送り假字につき一言せん。今日の作者は、眞字に續く送り假字に就き

心を用ひる人少く、人々勝手の書きごまにて、笑ふべき誤りを致せる者多し。注意す

べきことなり。送り假字は、動詞は其活く處よりつくべく、名詞には一切不用なり。さ

れば、

日本の文章には、自ら日本の文章の規則あり。規則に據りて巧みに組み立てたるを、眞の文章とはいふなり。諸外國の文も亦然り。故に、日本の文章にて、日本の文典に違ふ者は、日本の文章といふを得ざるなり。何程綺麗なる文字を使ひ、數千萬言を連ぬども、文典に適はざる文章は、唯、文字を書き並べたるのみのものと云ふべし。文典とはてにをばの使ひ方、動詞助動詞形容詞等の使ひ方より、掛り結びのとなど、一定の規則のあるものをいふ。この規則のために、過去のとか現在のとかを區別され、句の切るゝと否とを區別され、我と彼とを區別され、文章始めて明瞭となるべし。委しくは、文典書に就きて見るべし。次手なれば、送り假字につき一言せん。今日の作者は、眞字に續く送り假字に就き心を用ひる人少く、人々勝手の書きごまにて、笑ふべき誤りを致せる者多し。注意すべきことなり。送り假字は、動詞は其活く處よりつくべく、名詞には一切不用なり。されば、

動詞ならば、送らん 送り行く 送るべし 送れよ の如く、らりるれ以下に附
くればよきを、送くらん 送くり行く などの如く、らり以上のくより付くる人も
あり。

名詞の、人、白、赤、慰、樂、を、人ど、白ろ、赤か、慰み、樂み など書く
人あり。人は人なれば、どの假字は入らざるとなり。慰、樂等も、名詞の時は、送り
假字を入るゝに及ばずして、動詞に用ひるときは、其活くべき處より假字を付ると、
慰まんどす、慰みて、慰むべしなどの如くすべきなり。

又、無學なる小説家の書く一種の送り假字あり。文典に少しも拘はらずして、其眞
字の意を振り假字にし、其の振り假字に續くやうに送り假字するなり。たとへば、
人を虐待める。物を破毀せば。車を廻轉さんとし。請入しやい。

の如きこれなり。此の如き文章は、振り假字なければ、如何なる學者も讀むべからず
して、振り假字の爲めに漸く讀ませるなり。文典には頓着なく、振り假字ありて始て

讀むべき文章の如きは、文章と言ふを得ざるなり。是非とも、いぢめる、こわす、と
讀ませんと思はゞ、虐待、破毀等の漢字を使ふに及ばず、假字にて書きて事足るなり。
まはさん、いらつしやいも、廻さん、いらつしやい、にて何も差支なし、廻轉、請入
の漢語を用ふるは何の心ぞや。少年、文を學ばんとせば、決してかゝる魔物に近づ
くと勿れ。

第八章 學識の必要

内に德行ある者は、自ら其顔に君子の色現はれ、内に財寶ある家は、自ら其屋根光る。
内に滿つる所の氣、自然に外に發するは、掩ふべからざるにて、文章も亦、其作者
の學力思想の如何に由りて、巧拙と精粗とを生ずべし。故に文を作らんには、先づ、
其材料を畜へおかざるべからず。

大工の家を作るには、大なる材木より小なる木片、或は香木類の貴きより、松杉の

賤しき材に至るまで、能く集めおき、柱は柱桷は桷、床は床と、其宜しきに随つて用ひ、始めて見上ぐる程結構なる大殿堂をも建築し得べし。大小貴賤の木材は、學問して得たる材料なり。之を組み合せて建築するは文思なり。和漢洋古今の歴史は勿論、嘉言善行、山川草木の事より、車夫馬丁の言に至るまで、胸中に畜へおき、之を用ひて意匠を凝して一文章を建築するときは、善美を盡せる一編を得ると、猶良工の建てたる大殿堂に異らざるべし。然るを、其學識の仕入れに乏しき時は、太き大黒柱を使ふべき處も、細き柱にて間に合せ、堅實なる床柱にすべき處も、雜木にて間に合せざるを得ずして、鑑識ある人より觀るときは、口惜しき作なりと評する外なかるべし。若し又、其學力も思想も乏しきを、強て乏しからざるを裝ひ、よくも知らざる故事を引き、熟字を用ひ、世人を瞞着せんとすれば、醜き是より甚しきは無く、中身の露はるゝは忽のとなり。たとひ外觀に金箔をぬりて修飾するも、其屋内に新聞の反古を張りつけとするに於ては、世の笑ひを招ぐべし。外觀よりは内容に苦心すべし。

故に、博く各種の書を読み、成るべく才識を養ひ、用ある時に方り、之を適宜に出して用ふれば、一文を成すは、談話するより易かるべし。讀書の數少き時は、文字の本義を知らず、格言を知らず、形容を知らず、前人の已に言ひ盡したるを、自分の發明の如く思ひ、恥づるを知らざる弊に陥るべし。

第九章 文題を撰ぶと

文章は、思想を書き現はせるものなり。故に、思想ありて文章立どころに成る。思想なくんば、何を述べ何を書きて文章を成さんや。これ、文題を撰ぶに、注意せざるべからざる所以なり。

文題は、作者の深く知るものならざるべからず。己れの智識に相應したる者ならざるべからず。目の前に居る「犬の毛色」を記し、犬の居る「道路」を記し、道路に在る「砂石」を記すは、誰にても困難を感ぜざるべし。これ、犬道路砂石は、平生よく觀察す

る所なればなり。然るを、少年の文を見るに、多くは其題を、不適當なる作文書に取るが故に「秋夜笛聲を聴く」「九日小宴」「月夜泛舟の記」等、詩題に似たるが多し。秋夜の笛聲については、未だ自身に感動したるをなし。故に書くべき思想なし。書くべき思想なき故に、架空の妄想を書くか、或は作文書の作例に依頼し、甲の句と乙の句とを接ぎ合せ、丙の熟字と丁の句とを並べ、木に竹を接ぎ、竹に金屬を接ぎが如くにして、辛く一文を成に過ぎず。かゝる剪り採り文にて讀む者を感動せしめんとするも、誰か感動する者あらんや。恐らくは、作者自身も、少しも感動せざるべし。これ、眞情の在る文に非ずして、僞文なればなり。

少國民にて、毎號の如く文題について教ふる所ありたり。從來、懸賞募集の文題として出せる數題は、やゝ市上に流布する作文書の題と其撰を異にせり。一例を擧げんに、

- 雪合戦の記。 村社祭禮の記。 田家豊年の秋況。 予が愛犬。 戰爭中の正月。

人に聞きたる妖性の話を記す。 鼠を捕る記。 昔嘶を記す。 自村の物産。 生

來最も嬉しかりしと
等にして、勉めて見聞に慣れたる者のみを題とせり。故に其應募者の文の、優等なるに至りては、景あり情ありて、熱情其内にこもり、よく讀者を感せしめざるを無かりし。従つて、投書家の撰ぶ文題も、やゝ舊觀を改められども、中には、依然として詩題の如き僞文を投するも少からず。左に、文林投書の草稿より、其題だけを摘記して一言せんとす。

- 文林投書(未だ檢閲せざる分)百八十五編の内の文題表
- 蟬捕の記 2 某市の少年に寄す 孝行 衛生
- 納涼の記 月宴の招待 暴風に就て感ありり 入營を送る
- 本居宣長 某君に質す 養蠶法 病氣快方を報する文
- 義經を記す 光陰の説 2 某岬散歩記 某君を想ふ

- 某雜誌に就て
- 我家の景
- 男子の本色
- 夏夜旅行記
- 秋のあはれ
- 暑中休暇の仕事
- 雲を喜ぶ
- 3 讀者に懇願
- 2 正成論
- 2 初對面の辭
- 兄を惜む
- 某伯を惜む
- 陶器の製法
- 某地桃花を觀る記
- 足利尊氏
- 我等の教場
- 秋の漫歩
- 我が友某君
- 杜鵑を聞く
- 軍艦を觀し記
- 秋夜感あり
- 水災一周忌
- 臺灣に行く友人に送る
- 入校を祝す
- 大和魂
- 2 城濠觀蓮記
- 某生に一戦を挑む
- 予が夢
- 可笑しき世
- 同窓會記事
- 啞蟬の記
- 7 入欄を乞ふ
- 舟遊
- 2 隨筆
- 2 盤を撲つ
- 智識を得る場所
- 田舎の夏夕
- 3 某山に登る記
- 文林略評
- 落第を慰むる文
- 釣鐘由來記
- 蟲聲
- 小説の利害
- 2 忍耐の説
- 文林に闖入す
- 2 遊泳の記
- 2 偶感
- 金力智力論

- 扇買
- 2 友に寄す
- 衛生質問の返事
- 忠孝
- 觀月の記
- 木葉秋を報す
- 狂犬を撲殺す
- 名譽の奴隸
- 大水見舞の文
- 交際
- 苗採の感
- 勇の記
- 暑中讀書
- 卒業を賀す
- 文章論
- 遊學勸告書に答ふ
- 新聞の効用
- 農夫
- 3 觀瀑
- 友を送る
- 水蹈記
- 角力を取る記
- 雨を厭ふ
- 團結心
- 苦熱の記
- 2 蟻を見て有感
- 光陰を惜む
- 天災の慘狀
- 身体を大切にすべし
- 農談會の意見を問ふ
- 某氏に忠告す
- 某を追懐す
- 2 不思議
- 秋の聲
- 秋季食物の注意
- 勳釜の瀑布
- マホメツト傳後に書す
- 交際を望む
- 滿腔の涙
- 旅行記一節
- 暑中月に打たれし記
- 尙武會の記
- 幼者勉むべき説
- 今の世
- 秋收の景況
- 富士山
- 旅寓秋景
- 文林を讀みての感

山寺觀楓記

水浴法

題武學堂

秋の色

釋加見物に誘ふ文 2 某山參詣記

山水遊記

招魂社

2 記者に望む

我身と思ふべからず

京友に寄す

勤勉

洪水記

山水圖に題す

奢侈を戒む文

某氏に呈す

父母に呈する文

秋夜樂

莖蕪版製法

隆盛を祝す

軍人の碑に對す

2 秋日山行

電氣の應用

學術會開會を祝す

とる年かず

予が飼犬

某神の記

舊師に送る文

梅

蟲送を觀る

一日の避暑

秋聲

勉強と鍛練

秋の大快樂

教育の普及を謀れ

蠶業懇親會

夏朝散步

高德論

これ、積み重ねたる草稿の、上部より順次に擧げたる者なれば、現今の學生即ち國民の讀者の作る文題の一斑を知らるゝなり。(題の上に數字のあるは、同題の二人以上

に上りし印なり)。これ等に因りて見れば、不適當と認むべき題は甚だ少く、幾分か少國民にて平生唱導する文題撰定論の精神を得たる者の如し。入欄を乞ふ、初對面の辭、何々縣少年に一言すなどの類は、近ごろ、少年の間に流行する陳套の文題、月宴招待の辭の類は、不適當なるを論を待たざれども、其他は概して文を作るに適したる題のみなるは喜ばし。

少年の文は、少年らしかるべきなり。否、少年らしき文に非ざれば、精妙なるべき道理なきなり。少年未だ酒を飲まず、如何にして飲酒の快樂を記すべき。若し、果物を食ひ菓子を食べふ快樂に至りては、十分に之を承知するを以て、心にあらん限りの快樂を記し得べきなり。然るを、唯、在來の作文書の例を借り來り、たとひ飲酒の快樂を記すも、僞文は滋味なし。文の研究に供する題は、少年の身の邊りに、何程も有るものなり。決して、之を高遠未知の地に求むるを要せざるなり。自ら作文の誓古せんと思はゞ、よく知り切つたると、或は自身にて實踐したることを

題として、作り、目に見耳に聞くを得るものを先にし、無形のものに後にすべし。文の巧拙は兎もあれ、文の精神は必ず取るべきものあり。少國民にて、文林に採録するは、多くかくの如くにして成れる文を主眼とせり。然れども、學校の教室等にて、文題を課せられて、他の同窓者と同時に作る時は、文題は教師の撰ぶ所なれば、生徒の勝手に成りがたし。併しながら、その文題を、よく了解せざる時、又は全く知らざる時は、筆を執り紙に臨みて色々の考を盡すとも、決して出来べき謂はれなし。かくる題は、充分教師に質問し題意を明めて後作るか、或は明めがたき時は、全く筆を執らざるをよしとす。題意不分明のものに筆を執りたりとて、其甲斐なければなり。

第十 章

運筆を心のまゝにすべし

文を作るには、初より巧妙ならんことを求むべからず。先づ、運筆を自在にし、心のまゝに従はしむるを勉むべし。運筆心のまゝなる時は、巧拙は如何様にも成るものなり。

り。運筆の心のまゝとは、己れの言はんと欲する通りに書き得べき謂にして、近く短章句にて一例を言はゞ

犬は四足ある獸類にて、夜を守る性あり。(犬だけなり)

といふは、一直線の書き方にて、屈折なれども、

犬も兎も四足獸なれども、夜を守る性あるは犬に限れり。(犬に兎を併せ説く)

といふはやし複雑なり。更に

予が父、兎に四足あるは、猶犬に同じけれども、兎の夜を守りしとは未だ聞き及ばずと言へりと、或る老人の物語りなり。(犬兎と老人と其父と)

に至りては、一層複雑なり。最初は、一直線のことを學び、やし熟練するに及べば、複雑なる文を作るべく、縦横にも上下にも自由に筆し得るに至れば、記事にても、論説にても、小篇にても雄作にても、常に難澁の患なかるべし。かの畫工を觀よ。初めは、定規を用ひずして、直線を書くとを練習し、腕と心と一致して、直線曲線心の

まゝなるに至らざれば、一枚の書を作りがたきを。腕鈍くして紙に臨まば、圓く書かんとする月も、ゆがみたる月となり、直く書かんとする柱も、曲りたる柱となり、特に粗密濃淡遠近の法は、其宜しさに適はず、到底書として見るべからざるものとなるべし。作文も之に異るとなきなり。

さて、如何にせば運筆自在になるべきや。畫工の、寝ても起きても、風雲雨雪鳥獸草木家屋人物を見る毎に、書を以て之を觀る如く、熱心するにあり。世に大家名人と稱せらるる畫工も、初より巧妙なるに非ず、書さし數の多くして、熟練したるに因るなり。文章の大家も亦同じ。多く作文する間には、自然に筆力老熟すべし。故に、初學者は、毎日々々作文の心を失はず、日記に見聞録を記すなどを樂みとし、多作の功を積むべきなり。又、先人の文を熟讀し、妙所をば、二回も三回も復讀し、己れの作に比べて、斯くの如き言ひ廻はしが上手なり、斯の形容が好く適へり、と、心を留めて味ひ、或は全文の仕組を尋ね、或は書き始めの工合を吟味し、成るべく長進する様

に心かくべし。一方は、多作にて筆路を自由にし、一方は多讀にて其長進を謀らば、上達すると頗る速し。之に反きて、僅に文章一篇を作り、之を甲の雜誌に投書し、又之を乙の雜誌に投書し、評言を得て得意になり、自ら文章家なりと思ふ様にては、作文の望なき人と言ふべし。

第十一章 放胆と小心とのと

作文の初は、筆の運びののびくしたるを賞し、こせくしたるを取らず。のびくしたる文を作らんと欲すれば、思ひ切りて筆を執り、百事に頓着せず、流暢にして力あるを期すべし。最初より、文法用語に束縛せられ、一句かきかては考へ、又一句かきかては考へ、慎に過ぐる時は、文勢萎縮して、活氣に乏しく、或は書き出し大にして、結尾に力なく、酒酔の囁言に似るべし。

然れども、粗相なるが文章家なりと誤り悟るべからず。家を建つる大工は、建築に

着手せざる前より、其用材を吟味し、重力を測り、豫め出来上りの如何を察し、然る後に着手す。着手して後は、分厘の誤りもなく、豫察通りに落成するを良工とす。其間の苦心經畫は、慎密に慎密を加へ、柱に穿つ一つの孔も、適合せざることを期す。文章にも、柱あり、錠あり、粧飾の壁襖戸板の類あり。小心翼々として、其大體の計畫を熟考し、其用語を吟味し、其文典を吟味し、其修飾に注意せざれば、不恰好にて住居に適せざる家となり、曲り傾きたる家となり、臺所に錦を飾るに反きて、客間に檻樓を飾るが如き、不整理不調和の結果を生ずべし。故に、作文する者は、最も慎密の注意を要す。慎密の注意ありても、誤字脱字等の小過失は、中々免れがたきものなり。

之を要するに、初は筆筋の流暢ならんことを欲し、ためらはずして膽太く書き下すことを專いすべし。それより次第く、注意を緻密にし、文の道理結構より、用字用語の正しさや否に心を入れ、完全なる文章を得るに至りて止むべし。

第十一章 譯文のこと

我國の文章は、言文一致の體を除く外は、日常の言葉と同じき者なし。言葉にて「おいでなさい」といふを、文章にては「來られよ、」又は「請ふ來れ、」などし書く。故に作文せんには、日常の言葉を文章に直すことに巧妙なるを要す。この、言葉を文章にし、又は文章を言葉にするを「譯す」といふ。如何に面白きことを知り、之を口に言ふと出來たりとも、之を文に譯するを能くせざる時は、惜むべし文章に成りがたし。以下に、譯文の各體を擧げて、例を示す。唯、言葉のまゝなるを、折中文の體に譯したる作例を擧げたきなれども、前人の作中に、好き例を得がたきは残念なり。

又、譯文に、原文の一字一句を残さず譯する「直譯法」と、原文の大意を取り、字句を増減顛倒して譯する「意譯法」との二つあり。今、其別を立てずして掲ぐ。又、和文及び折中文を、漢文に譯したる例は甚だ多けれども、漢文を、和文又は折中文に譯し

たる例は甚だ少し。然れども、言葉と文章との關係を悟るには、何れなりとも差ふ所なし。未だ漢文を讀み馴れざる人は、特に、兩文を對照して、一句一句讀み行くべし。

折中文を漢文に譯せし例 原文大平記

譯文 賴山陽。

其比備前國に、兒島備後三郎高德と云者あり。主上笠置に御座有し時、御方に參じて揚義兵しが、事未成先に、笠置も被落、楠も自害したりと聞へしかば力を失て黙止けるが、主上隱岐國へ被遷させ給と聞て、無貳一族共を集めて、評定しけるは、志士仁人無求生以害仁、有殺身以爲仁といへり。……中略……見義不爲無勇、いざや臨幸路次に參り會、君を奪取奉て、大軍を起し、縦ひ尸を戰場に曝す共、名を子孫に傳へんと申ければ、心ある一族共、皆此義に同す。さらば路次の難所に相待て、其隙を伺伺とて、備前と播摩との境なる、舟坂山の巔に隠れ臥、今やくどぞ待たりける。臨幸餘

りに遅かりければ、人を走らかして是を見するに、磐固の武士、山陽道を不經、播摩の今宿より山陰道にかしり、遷幸を成奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば美作の杉坂こそ、究竟の深山なれ、此にて待奉んとて、三石の山より直達に、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂へ着たりければ、主上早や院の庄へ入せ給ぬと申ける間、無力此より散々に成けるが、せめても此所存を、上聞に達せばやと思ける間、微服潜行して時分を伺ひければ、可然隙も無りければ、君の御座ある御宿の庭に、大なる櫻樹有けるを押削て大文字に、一句の詩をぞ書付たりける。天莫空勾踐、時非無范蠡。御磐固の武士共、朝に是を見付て、何事を何なる者が書たるやらんとて、讀かねて、則上聞に達してけり。主上は聽て詩の心を御覺り有て、龍顏殊に御快く笑せ給へども武士共は敢て其來歴を不知、思答る事も無りけり。

兒嶋範長子高德稱備後三郎帝之在笠置也、範長高德

欲ニ赴^ハ援^ヲ聞^ク笠置^ノ陷^ル楠氏^ノ敗^ル乃止^ス己而聞^ク西帝^ノ遷^ル高徳^ノ謂^ク其
 衆^ニ曰^ク吾聞^ク志士^ノ仁人^ノ有^リ殺^ス身^ヲ以^テ爲^ル仁^ヲ見^テ義^ヲ不^レ爲^ル無^レ勇^也也^{ナリ}盡^ス
 要^ヲ以^テ奪^ル駕^ヲ以^テ學^ブ義^ヲ衆^ノ奮^テ從^フ之^ヲ臥^シ舟^ニ坂^ニ山^ニ而^テ待^テ久^ク之^ヲ不^レ至^ス遣^ル
 人^ヲ候^シ之^ヲ曰^ク駕^ヲ向^テ山^ニ陰^ニ道^ニ乃^チ間^道至^ル杉^ノ坂^ニ則^チ己^ノ過^ス矣^{ナリ}衆^ノ乃^チ散^ル
 去^リ高徳^ノ悵^然恨^ム不^レ能^ク去^ル乃^チ變^テ服^ヲ尾^ヲ駕^シ而^テ行^ク數^日欲^シ一^見帝^ヲ有^ラ
 所^レ言^ハ而^テ不^レ得^ル間^ヲ於^テ是^ニ夜^ニ入^リ帝^ノ館^ニ自^ラ櫻^ノ樹^ニ書^ク之^ヲ曰^ク天^ノ莫^ク空^ニ勾^ク
 踐^ス時^ニ非^レ無^レ范^蠡○旦^日護^兵聚^視不^レ能^ク讀^ム也^{ナリ}乃^チ奏^シ之^ヲ帝^ノ熟^シ視^シ
 之^ヲ欣^然心^ヲ知^リ有^リ勤^王者^也也^{ナリ}

又 例 原文常山紀談 譯文 大槻 盤 溪

山内一豊は其始織田信長に仕へき。東國第一の駿馬なりとて、安土に引き來り
 て商ふ者あり。織田家の士之を見るに、誠に無双の駿足なれど、價餘にたふと
 くして求むべき人なく、いたづらに引て歸らんとす。一豊其頃、猪右衛門と

いひしが、此の馬望にたへかねたれど、いかにも協ふべからざれば、家に歸り
 身まづしきは口惜きことばなし、一豊奉公の初に、かゝる名馬に乗りて、屋
 形の前に打ち出づべきものをと、獨言しければ、妻つくくと聞きて、其の價
 はいかばかりにてか候ふと問へば、黄金十兩とこそいひつれと答ふ。妻聞きて
 さはどに思ひ給はんには、其の馬求め給へ、其の料をば參らすべしとて、鏡の
 蓋の底より取り出して、一豊の前にさし置きたり。一豊大に驚き、此の年頃、
 自貧しくして苦しきことのみ多かりしに、此の金ありとも知らせ給はず、心強
 くも包み給ひけん、今此の馬得らるべしとは思ひもよらざりきと、且は悦び且
 は恨みけり。妻仰せの旨ことわりにこそ候へ、さりながら、是は妾此の御家に
 參りし時、父此鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、世の常のまに、努力ふべか
 らず、汝が夫の一大事とあらん時に、參らせよと戒め給ひき。されば、家の貧
 しきも、世の常ならば堪へ忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃あるべし

と承れば、此の事天下の見物なり、君も亦仕の始なり、よき馬召して見参させ申さんところ奉れといふ、一豊悦ぶこと限りなく、やがて其馬求めてけり。程なく京にて馬揃ありし時、打ち乗りて出でしかば、信長大に驚き、適馬やどて事の由聞き給ひ、東國第一の馬遙に我が方に引き來りしを、空しく返さんは口惜き事ぞとよ、それに年頃、山内は久しく浪人して有りきと聞く、家も貧しからんに、求め得たるは、信長の家の耻を雪ぎたる上、弓箭とる身のたしなみ、是に過ぎたる事やあると感じて、是より次第に用ひられきとぞ。

山内猪右衛門一豊、始篋仕織田氏也、適有東國人來販名馬者、安土諸將士皆驚其神駿、然以三價高之、故不能購也、販者將牽馬徒還、一豊見之、不勝流涎、歸家獨自嘆曰、痛哉貧也、我當事君之初、獲此名馬、以見主公者、不唯一豊一人之榮、抑亦織田氏之榮矣、其妻聞之、就問價曰、

黄金十兩矣、妻曰、夫君必欲獲之、妾能辨焉、乃取三金於鏡奩、致之一豊前、一豊且喜且恨曰、比來困窮之極、或恐及卿、願覆而卿絕不言有金、何卿之忍耶、妻曰、夫君之言亦有理、願昔者妾之來嫁也、妾父自納之鏡底、戒曰、汝勿以夫家貧故、費此金、必也有關夫君一大事、然後用之、妾聞、近日京師有簡馬之譽、今夫君而獲此馬、是一世之榮、而所謂大事、無乃此邪、是以敢爾、一豊泣而謝曰、卿之惠也、嶽翁之恩也、遂購其馬、無幾簡馬之期至矣、一豊乃騎而入京、風骨峻爽、奮鬣一嘶、信長望見大驚曰、猪右何所獲此乘乎、一豊具告其故、信長嘆曰、我家多士、而不能購一馬、洵為上國之耻、汝落魄歸乎、我乃能為此非常之舉、以一二酒我耻、武夫用心不當如此耶、一豊釋褐五百石、增為二

千石、遂以見三任用。

右の二例は、原文の一字一句を追ひて、直譯したる者には非ず。つまり、原文の意を失はざるを主とし、意譯したるものなり。故に譯者が、原文になき文字を入れて、文勢を補ひたるもあり。高德の記中の「悵悵不能去」、一豊の記中の「風骨峻爽、奮鬚一嘶」などこれなり。然れども、其原文の妙と、譯文の妙と、實に得易からざるなり。漢文を、折中文に譯すべきなど、よく、右の引例を見て、筆つかひを悟るべし。

次に、太平記の文につき一言す。この書の成れる時代には、文典の研究の、未だ興らざる昔なれば、今日の文典に入らざる點も多し。又、假名文中に、處々、漢文体の「被遷」、「不經」など、頗讀すべき字句あると、「給と聞て」「奪取奉て」の如く、送り假字の不足なる多し。今日の文ならば「遷され」「經ず」「給ふと聞て」「奪ひ取り奉りて」と書くべきなれども、古人に之を責むるは酷なり。

漢文を折中文に譯せし例

原文孟子

譯文 大田南畝

宋人有下邳其苗之不長而掘之者芒々然歸謂其子曰今日病矣余助苗長矣其子趨而往視之苗則稿矣。

もろこし宋の國に、百姓あり、その作る所の苗の、ながくのびざるをまだるしとて、手を以て、其苗をぬきて引きのばしけるが、おろかなるかほつきにて、歸りて、家内の者に話しけるは、今日つかればたり、われ苗のよびざる故に、手を以てひきのばしたりと。その子おどろきて、ゆき見れば、苗すなはちかれたり。

この譯文は、六ヶしき漢文をよく譯解し、少しも遺憾なし。百姓、まだるし、家内の者など、誰もいふ所の日常の言葉を用ふれども、絶て下卑たる點なく、上々の作なり。

俗話を折中文に譯せし例

この作例は、未だ適當の文を見つけざれば、出過ぎたるとなれども、編者試みに、短

俗話を挙げ、又其譯文を作り、僅に間に合せんとす。狗の尾にて貂の不足を續ぐとは、正にこのことなるべし。

元から、人間の氣根にも限りのあるものだから、並外れの勉強をすれば、却つて並外れのなまけが起る本ともなります。

元來人の精力は限りあるものなれば、非常に勉強すれば、却りて、非常の怠惰を生ずる基ともなるべし。

あす來るといふたが、ほんとうだらうか。

明日來るといひしは、眞にや。

もう十時になりますか、やすんでもよろしうございますか。

最早十時になり候が、寝ねてよろしく候や。

(候又は侍るは、他人特に長者に對して談話する場合の文に多しと知るべし。)

雜誌が、今來るか今來るかど、一日まらしたふれた。

雜誌、今や來る今や來ると、終日まら惱みぬ。

たつて斷つたが、お望みが再三に及ばれたから、仰通りに劍舞した。

固く辭み申しけるを、貴命再三に及ばれば、仰に従ひて劍舞せり。

第十三章 作例を暗誦すべし

維新前の漢學者の、漢文を作りし人々に、漢文二十篇三十篇を暗誦せざるはなし。これ自分の作る文章を、これ等の例文に同化さるゝやうに勉めしものにて、詩に、勢を取り意を取り句を取る法のある如く、亦、勢を取り意を取り句を取らんとせしものなり。今日の作文者も、古人の作例に據りて、其口調を悟り、其用字法を悟り、其文氣文勢を悟り、全體の仕組方を悟るに非ざれば、一文をも作る能はざるべし。如何となれば、今、作らんとする文章は、談話の速記録に非ざれば、其譯文の口調等は、常

に口舌の間に現在せざるべからず。又、用字法につきて、自ら疑を生ずる事ありとも、之を暗熟する所の作例中に求むれば、直に疑を決すべし。其他、如何にして文氣をもたせ、文勢をもたすべきや、かゝる題は如何に仕組みて書き始むべきやなどの類は、之を作例中に求むるより外なしとす。故に二三十篇の作例を愛讀し、居常寝ても起きても、之を口にすることを要す。かの子守兒童は、無聊を感むるために、唯獨り郊外に遊び居る時も、口には子守謠を絶たず。作文を好む少年の口にも、常に名文を往來せしむると、猶子守謠の如くならしめたし。

腹中無一物にては、名文成らず。必ず、森羅萬象を腹中に畜へ、よく之を出し用ひたるもの勝を取るべし。これ多く讀書すべきことにて、前條に述べたり。然して、この多讀は、唯作文の資料を仕入れるのみにして、其使ひ方は、之を作例に求むるより外なし。故に、作例の誦讀は、特に、深く遠く精しくすべし。

各自の意に適したる妙文を、二三十篇も寫し取りて一冊子となし、平常之を耽讀し、或は不明の點は穿鑿を遂げ、疑はしきは先輩に質し、獨り夜道するつれづれにも、之を口誦する程に力を入るゝ時は、文章の出來ざる憂なし。

先づ、作例を暗誦する前に、一篇の大意文勢章句照應等を窮むべし。山内一豊馬を購ひし記に就て左に一例を掲ぐ。

この文を作りたる大目的は何處にあるや。曰く、妻女の賢明と、當時の武士の氣風を傳へんがためにて、この二ヶ條には、最も力を入れて書けり。一篇中に、この二ヶ條の分量はどの位あるやと、自ら研究す。

この文の仕組は如何。叙事文なれば、事實の前後に隨ひて、平に書き下せるのみ。議論文の如く、入り組みたる仕組に非ず。馬を購ひたき熱情と、黄金の出處と、其夫婦の情と、馬を購ひて鼻を高くせし喜と、立身の榮譽とを、直叙せり。

この文の文勢は如何。名馬にて、誰も欲しく思ふなれども、價の高さが一の障りなり、一豊しはたれて愚痴をこぼす、よくよく欲しき様なり。次に黄金十兩を獲たるは、

實に望外なり、狂喜すべし。とても購ひ得られぬと思ひし馬を、買ふことを得たるなれば、喜は殊に引き立ちて見ゆ。簡馬の場に至りて、讀む者益々喜悅す。これ、前に悲み後に多く喜ばしむる文勢なり。

この文の照應は如何。東國の者來りて賣らんとせしが賣れずして率き還らんとすとありて、後段、信長の口より、空しく率き還らしむるは我が國の耻なり、よくも手前は買ひ取りたりと言ふ、これ前に照應せるなり。其の始織田信長に仕へき、とある前文に對し、奉公の初に、君も亦仕の始なり、是より次第に用ひられきとぞと末に結べるも注意すべし。又、價高し、身貧し、黄金十兩、久しく浪人して有りきと聞くなど終始、貧富の事を離れずして、夫妻の問答は、正に其大主眼の部を精しく寫すに足れり。よく味ふべし。

この文の段落は如何、初段は、徒に引て歸らんとすまで、買手なきを述べ、二段は夫婦の問答にて、しかも馬の事を離れず。三段は天下晴れの馬簡びの事にて、亦馬の事を離れず。文章は、幾十段連りても、題意を離るべからず。

この文と、口語との關係は如何。「はしくてたまらぬが、とても及びがなら」と、「望に堪へかねたれど、いかにも協ふべからざれば」と譯し「その直段は幾らですと聞く」と、黄金十兩と言ふたと答へた」と「其の價はいかばかりにてか候ふと問へば、黄金十兩とこそいひつれと答ふ」と譯せるなど、以下一々擧げずとも、其高雅にして意義明瞭なるとは、讀者自ら判定すべし。

この文に文典又は用字の誤はなきか。「其の始織田信長に仕へき」のき、其の始とある過去のきなれば用ひたるなり。以下きの字あるは、皆過去にのみ用ひたり。「引て歸らんとす」は未來を言ひたるなり。「取り出して一豊が前にさし置きたり」の句に、黄金十兩とも之をとも書かぬは、省略したるなり。又「適馬やとて事の由聞き給ひ」と書き、一豊の妻女の出金したることを露も書かざるは、又省略なり。同じきことを、二度三度書くは、あしし。文典文法に瑕瑾を見ず。又、用字にも、批評すべきなし。いた

つらに引て歸らんとす」と前に書き、後に「空しく返さんは口惜き事」と書けるなどいたづらと空しくと二種に書き、商人が歸らんとせしと、馬を返さんとせしと、歸返の二字を用ひたるは深き注意なり。

先づ、かゝる方法にて、前人の作例を多く研究し、暗誦して其助けをかるべし。熟するに従ひて、文思湧くが如く、唾も珠を成すといふ程に及ぶべし。他日、作例集を續刊して、各種の作例を示すべし。古人、易經に耽りて、綴革の三たび絶ゆる程勉めたるあり。字を習ひて、硯を三つ磨りへらしたるあり。文章を學ぶにも、他人に勝りたる苦痛を忍ばざれば、他人に勝れる文章を得べからず。

第十四章 剽竊の害

作文の思想乏しく、字句の心のまゝにならざる間は、兎角、他人の作を剽竊したがる者なり。少國民の投書中、この實例を見ると少からず。

一妙文に逢ひ、一妙句に逢ひ、それに比ぶべき程の文を作らんとするも、到底他に道なく、遂に其れを剽竊して己の有となすなるべし。剽竊も、其文字の使ひ方、筆の運び方等を、よく記憶する點より言ふときは、一利なきに非ざれども、卑劣の點より言へば、其害を贖ふに足らざるなり。唯に、徳義上の害あるのみならず、剽竊する者は、作文に刻苦するを嫌ひ、他人の作の、彼と此とを合せ、前と後とを綴りて作文せんとする依頼心を生ずるを以て、作例に頼らざれば、一句も筆の走らざる如き弊に陥るべし。

初學の間は、作例中の仕組を取りて、別に一文を作るは可し。又、文勢を取りて一文を作るも可し。これらは、竊むには相違なきも、剽竊といふほどのことならず、古來敢て咎めざるなり。仕組と文勢とを取るとは、原文のまゝを寫し、或は故に加除増減して一文を作るの謂に非ざるなり。

人或は言はん、歴史上の傳記、喪祭の朗讀文の如きは、一は同一の事實を古き書冊

に藉りて書き、一は普通の例体によりて書くものなれば、自然に同一の作となるを免れずと。然れども、人の傳記を書きて、前人の言をくり返すに過ぎざる時は、作文するに及ばざるなり。或は、前人の名を其まゝに出し、誰の記せる誰の傳は此の如しといふ丈にて事足るべし。又祝文弔文の如きも、例式ありとはいひながら、借金證や受取證とは異りて、例体内に變化を求めんと難からず。唯他の種類の文より、變化の少きのみ。作文は、かゝる究屈のものに非ざるなり。

觀梅の記文を作りし人は、古今幾万人ありしか測るべからず。然れども、秀逸の文の外は、自ら消れて世上に知らるゝことなし。他の文も皆然り。たゞ、其仕組なり、字句なり、前人を推しのけて新意を出したるもののみ、文名を天下に擅にすべし。少年の作文にも、この心得あるべし。唯に前人の餘唾を嘗めるに止るべからず。

第十五章 分量を測るべきこと

文章は、人情に近きを良しとす。誠實ならざれば、讀者の同情を引かざし。すべて、熱心なる誠實あるに非ざれば不可なり。特に、この誠實の如何は、分量につきて著し。

分量を測れとは、其文に入るゝ物の、分量に應じて記述すべきを言ふなり。たとへば、ここに、少年文章家ありとせんに、之を賞揚して、韓退之蘇東坡、或は山陽白石に比するときは、其比較餘り懸隔するために、讀者は、唯に過褒の言に過ぎずと爲し、深く同情を表せざるべし。若し之を、交友中の文章家といひ、投書家中の上手といはば、あまり掛け直なきが爲めに、讀者之を首肯すべし。

一兵卒の出征を祝する文に、世界の豪傑を引き來りて祝するは、分量を知らざるなり。一兵卒は一兵卒だけに「郷党は君が殊勳を望む」或は「某勇士は我郷より出でたる人なり、」云々を以て、或は規し或は賞するなどは、却て實意深し。

一郡一郷中に有名なる山川神社佛閣名跡等の記に、力を極めて之を揚げ、浮華の章句を用ひて天下無比のものゝ如く書くはわしゝ。もし、賞賛に過ぎ、天下無比のものと爲し終れば、實際、天下無比の稱ある富士山琵琶湖松島奈良日光等の記を作るに方りては、用ふべき文字章句なきに至らん。ある文章の大家、年少き時江の島に遊び、記行文を作りて先生の添削を乞ひたり。先生之を評して、誠に絶作といふに足れり、章句の上には批難すべきなし。唯、江の島にてかくの如き文を書かば、松島に遊びたる時如何に書くべきや、少しく扣へ目に書くべきものなりといひしと聞く。恰も、本題の適例なり。褒めるがよきとて、度を踰へて褒むべからず、形容も、程よき加減に止めおくべし。すべて其分量に應じて、誠を表するを文章の本色と爲す。

第十六章 筆録及び抄寫の益

新井白石は、來訪の客の談話中、取るべきあれば、心を静めて之を聴き、竊に之を筆

録せりといふ。白石の博識通達なるとは、世人の皆許す所なるが、其用心の深かりしを見るべし。又、自助論に、「考察の理と實歴の事を筆録して遺忘に備ふるは、詳慎にして學を好む人の爲る所なり」といひ、數多の實例を挙げたるが、意爾同は、法律書を二回自ら寫したれば、この書は己れの心より出でし如く明なりと云ひ、拜斯密士は父に従ひて製本の業を執る暇に、許多の書を読み許多の抄録を爲し、時として工夫せざるゝとなく、時として進歩せざるゝとなく、時として貯積せざるゝとなき人なりとの評を更け、米太は、最も勤めて抄録を爲し、記性の不足を補ひ、鈔録は、恰も商人の元手を帳面に載するが如し、若しこれなかりせば、幾許の利を得たるとも、損を受たるとも知るべからずといひし如き、何れも志篤き好學の士と言ふべし。

筆録及び抄録は、一般の學問に必要なが如く、作文にも最も必要なり。讀書の間に、妙句を得、妙辭を得、妙文を得たるに際し、漫然之を讀み過す時は、一時は注意せし如くなるも、自然に其記憶は朦朧と爲り、遂に再び想ひ出すこと能はざるに至る

べし。又友人の語れる有益の談話も、其時に筆録しおかざれば、永き間に消失すべし。故に、平常讀書する時は、片手に筆を釋てず、其時々抄録しおくべし。或は又有用の書を得たる場合には、勞苦を厭はず、筆寫して所藏すべし。自助論の言へる如く、自ら寫す時は、其記憶は堅くして容易に忘れず、恰も自己の心中より出でたるものゝ如くなるものなり。

維新前は、書籍の數乏しく、篤學の人と雖も、容易に讀書すること能はず、或は數十里の間に尋ねて讀みし人あり、或は自ら寫して學び、或は書林の恩恵にて、讀書せし人あり、今日の如く、數錢を投すれば何書にても望みのまゝに買ひ得る如きは、夢にも無きとなりし。然れども、今日は、書籍の出版多きに拘はらず、其割に博學者の出でざるは、讀書に精一なる人なきに因るなり。まして、抄録など務むる人少く、即ち之を高閣に束ねて顧みざる故に、學問は何れも淺く薄し。勿体なきことならずや。然れども、筆記及び謄寫を爲し、其多數を以て人に誇れとの旨趣ならざるなり。皆、

自己の作文のためにせよとのことなり。佳句の玉を聯ね、妙文の錦を織り、閑暇ある毎に之を繕きて諷誦すれば、美文の味を悟り、文才大に發達すると受合なればなり。讀書の際に、讀み方又は意義の知れざる字を拔萃し、之に解をつくらざる時は、其記憶の確實となるを見ても、筆まめなるものゝ利益の一斑は知らるゝなり。

第十七章 一篇の仕組のこと

文章の仕組は、六ヶしくいへば結構と云ふ。全體の組立方をいふなり。文題の意義も明に、文例にも熟し、筆とるに差支なくして一篇の文を作らんとするに際しては、先づ、其仕組方を考ふべし。この文は、如何なる仕組にすべきや、一客を設けて、問答を爲さしむる體にせんか。又、我れ之を他人に聞けりといふ風に書き盡さんか。自分の實地經歷のまゝを記さんかと、やゝ考へたる上に、はゞ一篇の腹稿を作るべし。腹稿とは、筆執らぬ前に、文章の大體を、腹中に想像して定むることなり。

文意の大体と仕組の大体とを、明に腹稿中に草し終れば、筆をとり紙に臨みて、澁難の苦を免るべし。

ついでには、前人の作例を多く讀む間に、誰の何々の記は如何なる仕組、誰の何々論は如何なる仕組と、兼て之を明めおかされれば、漫然筆をとるに至るべし。漫然筆を執れば、柵を脱し出でたる羊の歩むが如く、よく遠く歩むも、始より何處に達せんとの目的なく、行きなり次第の有様となり、無駄道もあるべく、西するかと思へば東するともあるべく、少しも取るに足らざるなり。初學の間は、古人の例に則りて仕組むべく、やゝ熟練したる後に非ざれば、勝手に草せざるをよしとす。

第十八章 段落のこと

文章の、全部が、續けざまに一事にて終るは稀なり。必ず、其間に、幾つも段落のつくものなり。前の山内一豊の馬を求めし記について見れば、一豊は「初織田信長に仕

へき」といふ書き出しにて馬商人の來れるを一段とす。一豊買ふ能はずして貧を口説くより、妻女との問答、遂に馬を買ふまでを二段とす。馬簡びの場に出でしほめられたるを三段とす。最終の「後に用ひられき」といふ句は、書き初の一句に應じたる餘筆なり。かくの如く、三段とも、其界を明に書くを可とするにて、作文するにも容易なり。

然るに、こゝに一の困るとあるは、段落々々を追ひて書く中には、文題に遠ざかり全く別題の文の如く見ゆるに至る弊なり。世界漫遊記にて例へんに

第一段に、日本長崎の出發を記す。第二段は上海までの記とす。第三段は、上海より承けてシンガポール迄の記とす。第四段は、シンガポールより孟買までの記とす。以下之に準ずるなれども、先づこの四段にて言はんには、二段の、長崎の後をつきて上海までを記し、三段亦上海よりシンガポールまでを記すは、大によきなり。他の文も此の如く、段落と段落との間は、つゞけて書かざるべからず。然るに、この三段四段

の記事中に、時々、日本々國に郵書を出したりとか、日本領事館を尋ねたりとか、日本人誰に逢ひたり、日本商品何を見たりと、日本に關し、故郷に關し、第初段の長崎を出發したるを願みざれば、この周遊者は、何國のものなるや、追々不明瞭になりて、題意に遠ざかるに至らん。これは、唯一例に過ぎざれば、他の文題につきて、想ふとあるべし。大段小段幾十段落に亘る長文にても、時々書き初めを願み、文題にて貫くと、猶、念珠は、一粒々々のものなれども、之を貫くに細紐あるが如くなるべしもし、この紐なくんば、瓦解散亂して、其形と精神とを供へざるものなり。

第十九章 道德を以て文の精神と爲すべきこと

文章は、世の中の風俗を改良し、孝悌忠信の道を教へ、すべて社會の風教を上進せしむるものならざるべからず。世の風教に、毫末も益を爲さざる文章は、其文辭如何に華麗纖巧を盡すも、流暢雅馴を極むるも、教て賞賛するに足らずとす。

勇士偉人節婦の傳記は、讀む者感興すべく、紀行文の巧妙なるは、一室に坐して、東西の名所を探りたる如き雅懷あらしむるのみならず、次て遊ぶ人の案どもなるべし。發明の記事、消遣の漫筆、何れも社會の公益を爲す。

少年の最戒戒むべきは、卑陋の文を作るとなり。一たび、道德を離れたる文を作る時は、正に復らんを極めて難く、遂に中途にして盡るに至るべし。たとひ戯れにせよ、卑陋の文に指を染むべからず。一紙半行にても、天下後世に毒害を遺すだけ罪惡を作る割にて、また自身の榮辱にも關するものなればなり。

文の字の本義は、道德の道にして、斯文といへば斯道といふとなり。道とは、人類の行ふべき正しき道を言ふなり。

世の下劣なる小説家、及び新聞紙のつやだね記者といふものには、髻を生やし羽織袴を着たる一男子にてありながら、よくも穢らはしとも思はで、かゝることを筆にかけたるものかなと思はるゝ人々もあり。文の貴さを知らず、己の地位の貴さを知らざる

に由るのみ。

第二十章 道理確なるべしと

白きを白しとし赤きを赤しとするは、一定の道理なり。春蒔き秋收むといふも、直線は直く曲線は曲るといふも道理なり。

文章中の事柄は、すべて、白きを白しとし、赤きを赤しとする理論に歸着せしむべし。人世に、あるべからざる非理を言ふべからず。

議論文を書かんとし、自己の論旨を述べたきばかりにて、他人を設けて反対説を言はしむるごあり、然れども「或人曰く、管公は、君を思はざる不忠の人なりと。予思ふに然らず」といふ如く、有るべからざる説を設けて自説の便益のみを謀るは、非理といふべし、双方とも尤もの議論といふ程の論者にて、それを論伏せしむる程の道理と筆力とを有たざれば、讀者の同情を得べからず。

又、花の簇り開けるを、遠く望めばこそ、雲とも雪とも疑ふなれ、其花の下にて眺むる時は、雲雪の疑も、力甚だ弱し。

第二十一章 意義の明瞭完全なるべしと

論理學に、定義を用ひるごあり。定義とは、ある物の性質を、完全に言ひ盡すなり。たとへば、「人」の定義を、

人とは、二手二足を有し、調理したる物を食ふ動物なり。

とする時は、二手二足あり、食物を調理する動物は、他に有らざれば、人類の定義としてはよし。然るに、調理したる物を食はざる野蠻人は、人たるごを得ざる奇觀を生ずべし。故にこの定義は、未だ完全ならざるなり。

作文する人も、少しく、定義を作るやうの心持なかるべからず。今、頻りに降り注ぎたれば、衣も袴も盡く濕ひたり。

との句ありとせんに、雨のためなるとは推して知らるるも、明に「雨が頻りに降り」と有らざれば、雨、又は雪霧霰とも解せられざるにもあらず。故に、この句に、雨の字のなきは、不完全不明瞭と言はざるを得ざるなり。又、

根の樹に腰打ちかけて辨當を食ふ。

と書くことありとせんに、辨當を食ふには非ず、辨當の中の飯を食ふなれば、辨當を開くと書くが正しきなり。新聞紙に「近火御禮」と廣告する人あれども、近火にて御禮を申さば、類焼にかゝりし時には、何を申すべきや。「近火御見舞の御禮」と書かされば、意義不完全なり。これ等は皆、短句についての例なれども、一篇の文章全体についても同じきことなり。

又、假字の送りかな等の略に過ぎしために、文意を甲にも乙にも了解するしとあり、「地所賣度段の者は御報を乞ふ」の類、「賣り度し」か「賣り度さ」か、明ならず。賣りたきと賣りたしにては、雲泥の相違を致すなれば、この類、よく注意して、意義は明

白にして、唯一筋の外には讀めざるやうに心がくべし。

第二十二章

文辭を撰擇すべきこと

本邦普通の文を作らんとするなれば、作文に用ひる文辭は、本邦の普通の人の解し得べき普通のもののみならざるべからず。純粹なる普通文辭のみにて、全篇を貫き、次にあぐる數點の如きは之を捨つべし。

(イ) 古言。近世用ひざる、即ち耳なれざる古言を用ふべからず。

(ロ) 方言俗語。或る一地方にのみ行はれ、他地方には通せざる方言と、下卑なる俗語を用ふべからず。若し、用ひざるべからざる場合には、注解をつくべし。

(ハ) 生語。古來用ひ來れる熟語の外に、自ら製作したる新語を用ふべからず。少年の文には、この弊最も多く、例へば、山の高さ形容に「高々乎として」

などの生語を用ひるは、一讀すれば、反吐を催すべき醜状あり。故に、文中の熟字は、先人の用ひしものに限る、撰ひ取るべし。

(三) 洋語。

本邦に譯字のなきものならば是非なき次第なれども、すでに譯字のあるものは、必ず洋語を用ふべからず。少年の、始めてリーダーを讀む時代には、よく己の姓名を洋字にて書き、作文中にも、洋語を用ひたがり、友人との談話中にも、一二之を挿みたるものなり。故めきて、大に其人の品格を傷つくるものなれば、必ず之を避けて、内に隠すべし。

第二十三章

文語を引用する時の注意

古來の成語を用ひる時は、一字にても變易すべからざる例なり。「シンタイコレキハマル」は、「進退維れ谷する」と書くべく、「是れ窮まる」「是れ極まる」など書かざるをよしとす。「木に縁りて魚をもとむ」「縁」の字を用ふるが例なり。勝手に、他の文字を

用ふべからず。この類は、常に注意して、其本を正しおくべし。

又、有名の人の格言を引用する時は、必ず其誰の言又は何書の語なるを明に記すべし。

左傳に曰く、禍福には門無し唯人の招く所なり。と。

晋の陶侃曰く、大禹は聖人なるに乃ち寸陰を惜めり、衆人に至つては、當に分陰を

惜むべし。豈逸遊荒醉すべけんや。生きて時に益なく、死して後に聞ゆるをなきは

是れ自ら棄つるなり。と。

の如し。然るを、唯漠然と、古人曰く、或人曰くなを書きては、引用の効なし。又、

少國民の投書中に格言を引用する體を見るに、突然と、

「人身の健康は無上の寶なりと。宜なる哉」 など書き、誰の言とも分らず、又ま

く自分の製したる格言と見らるるも多し。もと、格言を引用するは、裁判官の作る刑

事裁判言渡書に、刑法の明文を引用すると同じく、古人の金言格言を證にして自説を

確實にするなれば、其證言の出處は明に書かざれば効なし。まして、格言ならざるをや。

故に、古人の成句又は格言の類を引用する時は、確實に記憶するが上にも、必ず一旦は其原書を捜し出し、原文を正確に引用し、もし折中文に譯して用ひる時は、少しも原文の意に違はざるやうに譯して引用すべし。朦朧たる記憶のまゝを引用すべからず。

第二十四章

行文平易なるべきこと

文章は、誰にも解せらるゝはゞ、文章の効多きなり。諸人に解せられざるものは、刻苦して作りても、何の得る所ぞ。故に、用字用語は、極めて平易なるべく、章句も仕組も平易なるべく、心のまゝ力のまゝなるを妙文とす。險難の字、澁晦の句を作りて自ら博識を衒ふも、寸益なし。平易なる文は米の飯の如く、險怪の文はふぐ汁の如し。米の飯は一日も欠くべからずして、ふぐ汁は、旨さにもせよ、食はずもがなの副食物なり。

昔日、筑州の一書生來りて、林快烈公に見せし時、公曰く、子の國に具原益軒ありて、尤も著書多きとなるが、子も亦其書を読みしかど。書生曰く、益軒の著述は、甚だ俗書のみなれば、看るとも思ひ候はずと。公譯はすして、益軒の著す所は、悉く世用に適切にて、其人はたゞ筑州の傑士なるのみならず、天下の傑士なるにと言はれしといふ。今世も、尙、この書生に似たるが多く、世用に適切なるを願はずして高遠に馳せんとするは嘆すべし。

第二十五章

文勢雄健の事

文章は一句一句、明瞭に確實にして、其勢雄健なるべし。雄健とは、力士の足の、重みありて活動自在なるが如くにして、脚氣病者の足の如く、ふらくとせざるなり。

筆筋の流暢は、重に自在に筆の廻る方をいひ、雄健は重に力についていふなり。一

ざるなり。意義明瞭にて、誰人にも解せらるゝが平易の本色なれども、下卑るは甚だ悪し。一篇の文は、千万年にも残り、道徳を維持し、公益を謀る貴きものなれば、人之に向ふときは、襟を正して讀む如きものならざるべからず。然せんには、下卑をさけて雅馴に就くべし。先づ、一篇の文を作るに、下卑たる精神を入れず、下卑たる文辭を入れず、下卑たる体を學ばず、文辭は普通のものを用ひるにもせよ、氣高き品位ありて趣清く、緊りあるべし。たとへば、白粉をまばらにぬりたる多辯の下女の姿ならずして、洗濯着ものを着けたる淑徳の妻女の態あるをよしとす。

第二十七章 客説法の事

ことに、雪の白さを寫さんとして、特に、黒色の鳥を點出するが如く、主たる雪に全く反對色をなせる客、即ち鳥を設けて本旨を明にする如きを客説法といふ。獨り、黒と白との色彩に限りて言ふに非ず、萬事この心得あるべし。急性短氣の人を寫すに、

優長なる人を客とし、憂を寫さんとして却て喜を述べ、景色の佳絶を寫さんとして凡景を陪説し、仁者の慈善を寫すに、薄情ものゝ殘酷を客説する如く、全く反對のものを假りて比較に便ならしめ、讀む者をして明に了解せしむるなり。丈高き人を記す場合に、

平太郎は、並々よりは身の丈け稍高き方なれども、長五郎と共に立たしむれば、尙其肩にも届かず、さながら、富士山の前に立つ箱根山の如し。

といふやうに書かば、長五郎の丈けは、想像するに難からざるべし。

第二十八章 題によりて執筆の加減あるべき事

文題皆一様に筆を執るはあし。或は莊嚴なるべきあり、或は飄逸なるべきあり、或は清雅洒落なるべきあり、悲愴沈鬱なるべきあり、各、題によりて分別あるべし。長上貴人に奉る書、及び長上貴人のために記す文、及び神佛祝祭等に關したる文

は、重々しく、敬肅の体を具ふべし。この体の文中には、をかしく笑ふべきこと、なごは、入れぬがよきなり。之に準じて、花月賞翫の文は、清雅洒落なるべく、感慨の文は沈鬱なるべく、勇士の文は剛壯なるべく、解説の文は平直なるべく、飄逸の筆にて高士を寫し、豊艶の筆にて女性を寫すなど、各其宜しきあり。賞花翫月の文中に六ヶしき理論を挿むなどは、好文にても、東坡の赤壁の賦は千古の名文なれども、賞月の席に哲理を談するなどは、後人の批難なきに非ず。ましてや、東坡に及ばざる數等なる作者をや。作例の篇に、一々例文を示すべし。

第二十九章 讀む者の感情を害すべからざる事

作文する人は、讀む者の氣に投合するやうに思ひて筆執るものに非ず。故に、讀む者の氣に入らざることもあるべけれども、それは意に介するに及ばざるなり。自己の信ずる所を進むべきのみ。されども、他の感情を害すべしとは、なるべく避けざるべから

ず。感情を害する時は、同情をひきがたければなり。

馬琴の偶筆などを讀みたる人は、必ず、馬琴が、博識をてらひ、物識りふりて書ける筆法多きに氣付くべし。この人、やゝ傲慢の人物に相違なかりしも、其著述にまで「讀む者は皆淺學の輩なれば、われ教へて遣はさん、有り難く承はれ」「この説は、古今一人も知らず、我一人の發明秘説なれども、情によりて教へ遣はさん」などの文意多きは、甚だしき過失なり。たゞ其身の徳を傷ふのみならず、文章の直打を下すと數等なり。これは、倨傲の一例にすぎざれども、之に類したることは、なるべく避くべし。文章中に、故に洋語を入れて博學をてらふも非なり。他人の解しさうのなき難字を入るしも非なり。身分不相應の大言を吐くも非なり。何れも讀者の同情をひきがたき害あれば、目の前の客と應對する心持にて、禮義を慎み温雅に記述すべし。

第三十章 愛を割くべき事

適當の字句を案出し、又は適當の資料を得れば、是非ともこの文章中に入れ
たしと苦心するごあり。又、この人の傳には、かの行狀も入れたし、この行狀も入れ
たし、この紀行文には、この石かの山を入れたしと、苦心に苦心を重ねるも、入るべ
き適當の段落など無くて、筆の滯滞するごあるべし。

文章は、詳密なるが故によしといふには非ず。其主眼とする所を明にするをよし
とするなり。故に傳記をかくにも、其人の一生中の、最も特筆大書すべき條件に、十
分に力を入れて精神をこむる時は、其他の些少のことは記さずともよきなり。遊記文も
一樹一章の些少のごよりは、其全体の精神を明にするが肝腎なり。故に、記述すべき
材料多くありとも、記するに足らざる者は勇斷を以て愛を割かざるべからず。特に、
面白き字句を得たるによりて、其字句を用ひたきがまゝに、事實を造りて文章と爲す
などは、謂はれなきごなり。材料は、玉と石とを撰ばず、悉く之を文中に入れんごを
欲すれば、六阿彌陀詣ての老婆が、嫁の噂するを聞く如く、唯にくどくしきごみに

て、雄健ならず、簡淨ならず、主旨散漫の弊に陥る。

ある人、知人の紹介にて、有志者某の碑文を作らんごを、編者に乞はれしごありき。
その志士の行蹟は、道路橋梁水利等、公益を起したるを最大とし、學校の委員を勤め
たるごもあり、政治上の奔走を爲せしごもあり、他人の不和を仲裁したるごもあり、
生花茶の湯を好み、算術を好み、一村内にては、推尊せられたる人なりといへり。行
狀書を出し、右の大小の行蹟と、度々官より賞賜せられたる年月目録等を、一も殘さ
ず傳へ呉れよとの乞なり。作文などせしご人には、往々ある請求なれば、事情を
語り聞かせ、道路水利等の徳行のみにては、傳ふに足るべき人物なれば、それだけ詳
かに記し、學校の政治上の意見のごなどは、一句か二句に概括せざればあしく、又
賞典等のごも、たゞ履歴書ならば兎も角も、碑文といふ上は、最も重き賞賜のみを詳
記し、他は省略せざれば不都合なりと言ひしに、甚だ不平の様子なりしが、然らば、
他の先生にお頼み申すべしとて、辭し去りしごありき。其後如何なる碑文出來たるや

知らざれども、後日、前の紹介人に逢ひて此事を話し、共に一笑せり。

第三十一章 變化の事

文章は、平易なるべしとは言へど、平板に流るゝはあしし。平板とは、首より尾まで、少しも變化なく、一律になることなり。字句にても仕組にても、變化なくして一律にのみ赴く時は、雄健ならずして、文勢振はず、文才ある者のせざる所なり。

字句の變化といへば、餘りに同じきをさぐるやうにするなり。作者のくせによりて少國民の投書中には、僅一行中に「何々しければ」「斯くくしければ」と、「しければ」を幾たびとなく用ひる人あり。或は又「渺々」「漠々」「累々」「屹々」「青々蒼々」など、重字を數限りもなく用ひる人あり。これ等は、耳に障らぬやうに、變化させざればあしし。又、句も、同一の句を再三用ひぬやうに工夫し、句の形も、「如し」の字を連ね用ひる場合には、「綿の如く、絲の如く、幔幕の如く、樓閣の如く、虎狼の奮闘す

るが如く」といふやうに、四字づゝの次には五字、其次には又十字といふやうに、不規則にし「者」の字を連ね用ひるには「笑ふ者、泣く者、嘲り罵る者、相撃ちて争ふ者」の如く、長短を相交え、正中に奇を求むべし。

又、段落をも變化せしめざるべからず。たとへば、横の繪巻物の如く、讀み行く中に、目ざまの變換するを貴ぶものにして、初段と二段とは變り、二段と三段とは變り、猶、芝居にて、初幕に室内歡喜の舞臺ならば、次幕にて、郊外憂愁の舞臺、三幕にて酒樓滑稽の舞臺を見せ、其主人公は、何れの幕にも關係するが如くなるべし。

次に、變化を要するを尙一つあり。全体の仕組の變化なり。何の題に向つても、同一の仕組みにはせず、時々新意匠を出して仕組むべし。現時の少年の遊記文の、

初段に、日曜休日にて讀書する處へ、友人來りて出遊を促したるを述べ、

二段に、共に出で、山麓まで歩行せしを述べ、

三段に、東は如何西は如何南北は如何と、眺望の勝を述べて、奇絶快絶を三呼せ

しごとを述べ

四段に、暮色蒼然遠きより至れるにより、歸宅して燈下に之を記すと結び
 百人にても二百人にても、其仕組の同じきと活版にて印刷したるものゝ如きは、作文
 するに非ずして、他人の文の型へ、年月日地名人名を鑄込みたるものといふべく、最
 も嫌悪すべきなり。遊山にも、他人に誘引せられずして、自ら誘引したることもあるべ
 し。晴空一朶の雲なき日のみに非ずして、曇天雨天の時もあるべし。蒼然たる暮色と
 遠寺の鐘聲をまたずして歸りし日もあるべし。これ等は必竟、虚文より起る弊なれば
 實地の文を作れば、仕組も自ら別様に成るべし。
 議論文などには、「或人來りて問ひて曰く」と書き始めて、自分の意見を吐くこともあ
 り。又、最初に、事實を略説し、次に議論を起すともあり。結構の變化限りなし。又、
 後篇に例を擧げて説くを待ち給ふべし。

第三十二章

改竄及び草稿の清書の事

先づ、一文成りたらば、幾回となく通讀し、字句を穩當にし、聲調を和げ、工夫のあ
 らん限りは改竄すべし。次に、一字一句づつ、自ら講義すべし。講義の間に、意義の
 不完全なるを、用字のあしきなどを、幾處も發見するものなり。充分改竄して、こ
 れより上は自力にて及びがたしと思ふに及び、始めて朋友に見せて批評を請ふべし。
 古より、大家積學と言はるゝ人々の、一文を世に出す前に、必ず朋友の批評を受け
 たる例は甚だ多し。自分の氣づかざることも、多くの人に見せて批難せしむれば、益を
 受くると決して少からず。

頼山陽は、近世の能文家にて、三尺の童子も其名を知らざるなし。然るに、尙其文
 稿を佐藤一齋に致し、添削を乞へり。今其漢文を直譯文とし、一齋の加筆せし跡を示
 すべし。原文長ければ、僅に最初の數行を掲ぐ。

續入大家文讀本序。

頼山陽の作、佐藤一齋の批。

余嘗テ私ニ國史ヲ修メ、豊臣氏ノ事ニ至リ、蓋シ筆ヲ投ツテ嘆ズル者有リ。豊臣太
 閤ノ師ヲ海外ニ出スヤ、或ヒト宜シク漢文ヲ善クスル者ヲ以テ從フベキヲ説ク。
 公笑ツテ曰ク、吾將ニ彼ヲシテ我が文ヲ用ヒシメントスルノミ、何ゾ彼ノ文ヲ以テ
 セント。此レ大言不實ト雖也。以テ文士ノ陋ヲ警ムベキ矣。今季徳ノ此ノ書、亦豊
 臣公ノ咲フ所ニ非ザルヲ得ン耶。且ツ季徳ハ仕ヘテ武藉ニ係ル、何ゾ長槍大劍ヲ以
 テカヲ國家ニ効サズ、而シテ。此ニ區々タル。我ニ自ラ文有リテ、彼ニ須ツ無キ
 ハ、猶我ニ自ラ穀帛有リテ、彼ニ須ツ無キガゴトシ。彼ニ須ツ者ハ、藥物ニ止ル。
 其他ハ書籍ト雖也、經史ノ外、後儒ノ紛々タル著作、概子無用ニ屬ス。無用ノ尤
 ナル者ヲ、文章家ノ言ト爲ス。且ツ八家文已ニ多ク流傳ス、何ゾ必ズシモ沈氏ノ選ヲ
 待タン、而シテ我又之レニ付益スルニ在ラン乎。嗚呼余反覆之ヲ考ヘ、以テ其然
 ラサルヲ知ル有ル也。(以下略ス)

て、流石大家の文も、添削したる上にて觀れば、まゝ惡しき點あるを知るに足れり。
 文を善くするを能くと正し、豊臣太閤を豊公とし、豊臣の言をさびしく短くしたる如
 きは、一齋の方のよきと一目瞭然なり。以下、添削の跡につきて、熟讀自ら了解すべ
 し。朋友に益を請ふとは、かゝることをいふなり。
 さて、文章成りて後、師匠又は先輩に添削を乞はんとする時は、謹直に草稿を清書
 すべし。先輩に呈出する草稿を、謹みて清書せざるは、禮儀を缺くものにして、少年
 の道義に背く。又、再三鍛鍊したる後に非ざれば、添削を乞ふべからず、唯に依頼心
 を増すのみにて、効益空しければなり。

第三十三章 先人の文話

漢文につきての先人の文話は、随分多く有れども、通俗の折中文に就きてのは、甚だ
 少し。されば、漢文の文話にても、其粹をぬきて多く採録せん考なりしも、紙數に限

りありて其豫期を果し得ず、左には、僅に室皆川二氏のみのみの文話を掲げ、本編を結ぶべし。心して讀まば、作文全体につきての、教誨となるのみならず、折中文の文範ともなりぬべし。忽々に讀み過すべからず。

作文は讀書にある事を論ず 室鳩巢

後數日ありて、諸客來會せしが、翁にむかひて、前日倭歌唐詩の事、くはしく承り、異聞を得侍る。但倭歌は、われらごときもの、かねて學ばぬ事に候へば、必しも自よむには及ばず。詩も必しも自作らずとも、古詩を吟詠しても、襟懷をきよするに足りぬべし。たゞ、文章はそれとはたがひ侍るべし。只今聖賢の書を讀み候ふも、文辭によりて求むる事にて候へば、文辭の法にくらくしては、其の濫に通せざるのみならず、その義をわやまらるべく候ふ。其上孔子も、辭は達するのみと仰せられ候ふ。自身に文辭をもて、書を解し義理を論し候ふも、その法を知ずしては、道理をいひ達する事も成しがたく侍るべし。今我等如きの晩進後世、文章を學び候には、いかゞ意得てよく

あるべく候ふか、承りたくこそといふに、翁笑ひて、昔漁獵をこのむ人のいふを聞きしに、魚をとるよりは、鳥を取るはおもしろく、とりを捕るよりは、しく狩は又おもしろきものなりとぞ、其相手にすることからの大きなにしたがひて、おもしろきまざるにて候ふ。翁いとけなかりし頃、小倉の百首をよみ習ひしより、和歌のをかしまふしをも、かたはし承りしり、其の後學に就き候ひてより、又詩文を好み候ひて、是には多くの年月を費し候ひき。今はくやしき事におもひなから、はや七十にあまう候へども、さすが日ごろのすきは、いまだやみがたくこそ候へ。それにつきて、思ひ候ふに、和歌よりは詩はおもしろく、詩よりは、文章は又おもしろく思ひ侍る。翁かねて申す事に候ふ。義理はふかきものに候へども、義理の工夫は、我邦の人とても、からにおとるべきにもあらず。さる程に、宋明諸儒の説をもこゝにて是非し、その及ばざる所をも發明するにて候はずや。たゞ此文辭ばかり、こゝにて常に取りあつかはぬ事にて候へば、書をも國語をもて訓し、顛倒してよみ來り候ふ程に、老師宿儒とい

ふとも、よく辭に得て意に通ずる事難かりなん。況多くは涉獵をつとめて、書を読む事も雜駁なれば、いかでか文章のふかき味をしるべき。是によりて、自作れる文章も、辭なづみ意塞り、或は奇險を務め、或は怪僻に涉り、白古文辭と稱して世に傲れども、大かた見るにたらぬ事にて候ふ。たゞへば富商大買の、已が貨財多きに誇りて、簪纓家の風流を真似するが如し。珍器名物などの飾りにて、紛らかしぬれば、はしく似たるやうにはあれど、かのやすらかにしておのづから風流なるに比すれば、なにとくいやしきさまありて、更に同物にあらず。又口吃する人の物語するが如し。さながらわけてぬにもなれど、言葉つかへていひとり得ざる事多し。今此弊を矯めんとならば、漢唐以來、明理の文をよみて、其中より文法をさとるにしくはなし。その鉅作を以ていはゞ、賈誼か治安の疏、董仲舒か對策の文、韓退之が原道、歐陽永叔か本論等の篇を最とすべし。其の外柳子厚、三蘇、王曾に至るまで、古今大家と稱するの人文書を見給へ。平易條暢ならざるはなし。いづれか今人の好める兪州、滄

溟が文のごとく、詭異難澁なる事やある、文に韓、柳、歐、蘇あるは、詩に李、杜、王、猛あるが如し。されば宋明、諸家の文章を論するにも、韓柳歐蘇を宗とせざるはなし。然れども、諸家の文章を論する、皆過高にして、初學に益なし。章法、句法、抑揚、頓挫などやうの沙汰は、粗熟して後の事なるべし。むかし孫華老、歐陽公と相識る事久し。或時間に乗じて文字をもて問ひしに、歐公の曰く、サクフニハダシエツナシタ、トクシヨオホケレモコレナク、ルオンツカラダクミナリセシノクワントクシヨニモノクマダセンシツクルスクキニアリイッペンイレルゴトニスナハチアヤマチナロトニモ讀書多則爲之自工、世人之患在下懶カクノエトクイタルアルモノ、スグナシシヘイカチナズ、ヒトノシテキチマダズ、マサクミツカラ、ヨクコレナシムル讀書又作文、無他術、唯即求過人、如此少至者、疵病不必待二人指摘、多作自能見之、翁おもへらく、歐陽公の言、平實にして味あり、文章を學ぶにこれより近きはなかるべし翁數年文章に心を用ひて、何とぞ捷徑もあらんかと、いろく尋ね求めしが、後に文を學ぶに、別に悟入の法なし。たゞ讀書にあり。歐陽公の言我を欺かざる事をしりぬ。歐陽公、古今文章の大家として、其の言かくのごとく、其の上、古人の爲にいへるに、心底をのこさざる事あるべからず。しかるに、其言是に過ぎざれば、此の外に余法な

きこと明けらし。又韓退之答李翊書、柳子厚答韋中立書、並に蘇老泉か上歐陽
 内翰書を見て知り給ふべし。三子はいづれも。初より著作を事とせずして、積年の
 力を讀書に用ひしかば、讀書に勞して著作に逸せし事、はからざるに符節をあはせた
 るが如し。されば韓、柳、歐、蘇か文章におけるは、天授の才といへども、それさへ
 讀書より得ざるはなし。今吾黨の學は、文辭を専らにせねば、必しも文章家を學ばん
 とにはあらねど、常に用ふるに辭達して、事のかけぬ程にとならば、それも古文辭を
 よむにつとむべし。今の後生、多くは躁進にして、久しく思を讀書に潜むるにたへず
 常に志を著作に鋭うして、たゞ自ら文を作りて、師友の指摘を求むとのみよしと思へ
 り。知らずや、指摘の益は大体文字程に中りて、中に一二所の疵病を改め、又は彼こ
 れより善しとするをいふなり。今率易にして、體をなさざる文字もて、是正を求むる
 は、たとへば、室屋のごとし、結構次第を失ひ、材木等倫を失ひ、或は堂を後にし、
 室を前にし、或は棟を椽とし、椽を棟とせば、一向に住居をなさずといふべし。大匠

といふども、いかゞ脩補すべき。たゞ穹を塗き、傾を支ふる迄にしてやみなまし、今
 後生の文字を指摘するも、亦かくのごとし、爾においてなにの益あらん。この故に、
 翁かねて後生にいへらく、先筆を下さず、その作の功を讀書にもちひて、古文辭に思
 をふかうせよ。久しうして、必古人の口氣になれ、古人の作意を得て、我が心に悅懌
 する所あるべし。然らば、時々舉揚するも工夫の一つなりと、先儒もいへば、著作を
 一向に癢せよにもあらず、但十に七八の力を讀書にもちひ、二三の力を著作にもち
 ふべし。かくして、月を經、年を經は、韓、柳、歐、蘇かやうになくとも、相應に悟
 入する所ありて、文字を作るに、手熟し、筆活して、用ふるに隨ひてたりぬべし。是
 晚くしてはやく、遠くして近き道なり。(駿臺雜話)

文章の盛衰を論ず

西漢の文章は、奏疏制策の外、賈誼か過秦論、司馬遷か答任安書、司馬相如か諭巴
 蜀檄、揚雄か解嘲、この類猶多し。其の文大抵雄偉高邁、後人の及ぶところにあらず。

東漢以後、文章衰弊して振はず。六朝に至りて、四六排偶をもて工とせしかば、規模蕩盡し氣象萎蕭して觀るに足るものなし。唐に至りて、その餘習未だ除かざりしに、韓退之柳子厚の二子、いづれも超絶の材をもて、一生の力を盡くし、今古の言を陶鎔して、自機杼を出しければ、其の文上西漢を追ひて、殆過ぎたりともいふなり。東坡が韓文公の碑に、文起八代之衰、道濟天下之溺といひしが、道濟天下之溺は知らず。文起八代之衰といへる、異論なき事なり。誰か然らずといふべき。其後五代を歴て、漸々衰へしを、歐陽、東坡の二子、相繼いで出でて振起せしかば、文章再いにしへに復しぬ。其の文、光明正大、又韓柳に追配して羞ぢざるべし。是をもていふに、韓、柳、歐、蘇は文章家の大宗たり。古今文章においては、一人も非議するものあるを聞かず。されば明朝に至りて、詞臣文士多く出で、文章世に盛なりしが、劉基、宋灑、李夢陽、何景明が徒、名を一時に擅にし、大家と稱せられしかども、韓、柳、歐、蘇が文においては、一言も雌黃を下したる書なし。おもふに、ふかく慕尙して欽服し

けらし。其の外文章をもてきこゆるもの、唐順之、王慎中が徒、各一家の説を立つといへども、いづれか韓柳が遺流をくみ、歐蘇が余波を揚げざる者ある。然るに文章は、時運と盛衰する物なれば、明の中葉より以後稍々衰へ行く程に平易なるは鄙俚となり、簡古なるは剽竊となり、それより天下の文章、科擧帖括の習に落ちて、是を時文と稱せしかば、古文は見るべからざることとなりたり。此の時に當りて、古文に志ある人世に輩出して、復古矯俗に急なりしも、韓、柳、歐、蘇が文をこそ赤幟とせしか、篇ごとに揄揚し、句ごとに品藻せざるはなし。しかれども、材識高からず、濫奥深からざるによりて、その所作の文を見るに、古に似て古にあらず。雅に似て雅にあらず。最後に、李攀龍、王世貞出て、その平易にて庸俗にちかきを厭ひて、相與に奇怪の文を造作し、狂蕩の論を濤張し、洗洋自ら恣にし、一世を鼓動せしかば、四方の文士、靡然として歸依せし程に、號して文章の主盟と稱しき。されば滄溟鳳州も、常に韓、柳、歐、蘇が文をば、褒稱して、終に非議する事をさかず。鳳州は晚節に及びて文友と文

を論して、やゝ後悔して、本正にかへる志ありしかども、及ばざりけるよし、饒謙益が、列朝詩集に見ゆきと覺ゆぬ。しかるに、今文章をもて自ら許す人の、王氏が棄餘を捨ひて、彼か四部稿を師祖とすと見れば、又鳳州が心にたがひて、反りて韓、歐を毀るこそいと意得かたけれ。定めてふかき意もあるにかあらん。翁などか、小兒にしるべき所にあらず。(駿臺雜話)

文章の爲に書の讀方を論ず

後數日ありて、諸客來會せしが、翁に前日文章の爲めに讀むべき書、御示教ありて承りて候ふ。それにつき益をこひたき事の候ふ。右御差圖の書は、我等とも日ごろ讀み候ひて、常に取あつかひ申す物にて候ふ。今改めて文章のために讀み候には、よみやうの意得もあるべく候ふや、承りたく候ふといへば、翁、それは尤なる心つきにて候ふ。大凡書は多讀をよしといたし候へども、たとひ千卷萬卷の書讀み候ひても、その書に意を精しうせず、たうはべにて一と通りに讀み過しては、何の益をか得べく

候ふ。寸鐵人を殺すとて、一寸の鐵にても、よく鍛へは人を殺すにたり、長道具たりといへども、なまりては用にたへざるが如し。むかし東坡、自、西漢書をよみし事をいふに、治道、人物、地理、官制、兵戰、貨財の類一過ごとに、專一事をもとめしかば、數過を待たずして事々精覈なりきとぞ。虞別廬是をもて、人に教へて讀書の良法としけり。今此法にしたがひて、五經、左傳、遷固か史をも文章の爲めと讀まんには義理事實共に含着せず、たゞ文章の一節を主としてよむべし。志慮分るゝ所ありて、專一ならねば、意を精しうすることをわがたし。それにつきて、翁日ごろ四法を定め侍る。その一に字例、文字を用ふる例なり。たゞへば、藥の能あるが如し、參芪同じく補なれども、其の用ひ異なり。芍連同じく瀉なれども、その用ひ異なり。文字も亦しかなり。勉の字務の字、同じくつとむなれど、其もちひ異なり。慎の字、敬の字、同じくつとむなれども、其の用ひ異なり。すべて、我が朝同訓の字皆その同異を辨すべし。もし同訓にまよひて、其の同異を辨せずしては、こまのゆく方をしらすいて

象棋をさすがごとし。必用ひ誤まる事多かるなり。其の外の文字も一字あれば、一字の能あり。焉、矣、乎、哉。等の助字に至るまで、同異しりやすきもあれど、少しのたがひにて、疑似するもあれば、とかく古人の用ひし例をひろく考へ、彼此をかよはしてみるにしくはなし。其二に語類字、かさなりて語をなす。其類一ならず、政治に係る語あり、兵戦にかゝる語あり。人の性行にかゝる語あり、事の措置にかゝる語あり、古訓の語あり、比喩の語あり、其他あげていふべからず、必しも其の語をすぐに取りにはあらねども、古の成語を多く記して、其中より轉化し出せば、おのづから雅にして俗ならず。直にして迂ならず。其の三には鋪叙語を鋪きて章段をなすをいふなり。群分類聚の所あり、交互錯綜の所あり、意を設くる廣く、言を布く瞻はしきを見るべし。其四には体裁、鋪叙によりて、首尾をなすをいふなり。起端あり、承接あり、轉折あり、收結あり、文勢の抑揚、頓挫、條貫の滯らざるを見るべし。右の四法を以てよまば、汎然とよむにわらず、加之歲月の功をつまば、おのづから自得する所あら

ん。筆を下し文と作るに、用字に誤らず、造語にいやしからず、鋪叙備はり、体裁正しく言をたて、道と論する、助けとするにたらんかし。もし、徒に文字をもてあそび、觀美をつとめ、これをもて學問の事とせば、浮虚無實の甚しきものとふいべし。かの文雅風流を道とするものと、なにをもて異なるべき。しからは、いまかく云々するも、人を邪に納るゝにして、翁も其罪なしとせず。今世の學者多くは輕俊にして、實行を心とせず、たゞ文辭に馳騁して、虚譽を求めざるはなし。然るに、師儒たる者たとひ痛くこらすとも、猶たゆるべし。况道は文雅風流にある説をもていざなはんには、誰かあひ率ゐてしたがはざるべき。且いへ、文は道德にあるか、文章にあるか、道德にありといはゞ、文辭はもとより道德にわらず。文章にありといはゞ、いはゆる夫子の文章は道德の美の、威儀文辭にわらはるゝをいふなり。今たゞに文辭をさして道とするは、玉帛をもて禮とし、鐘鼓をもて樂とするに同じ。されば孔子も、禮云禮云、玉帛云乎哉。樂云樂云、鐘鼓云乎哉。との給ひき。翁も聖言を真似て、文といひ章と

いふ、文辭をしもいはんやといはましとぞ思ひ侍る。(駿臺雜話)

文 訣

皆 川 淇 園

○文章を初學に書習ふには、只一道の事を、始終して書くべしと、言ふに付きて、嘗て思ひ合せたるをあり。余が識れを所に、一人の圍碁の名手あり。此名手の家へ、余が朋友數々圍碁に行きたりしが、其後此人、碁を打やめたりしに、名手余に語りて、彼人の碁は、上手になるべきよき筋の碁立なり、打やめたるは惜むべきとなりといひたり。余因て上手になるべきよき筋の碁立とは、如何なる所を以ていへるにやと、問ひたれば、彼名手答て、其人の碁立は、最初の一石を打はじめたるより、終りまで、唯一筋の思ひよりを立て、打給ひて、中頃より物好のかはるとなし。是上手になるべきよき筋の碁なりと云たりき。文章の稽古も、たゞ一道の事を以て筋を立てて行くを心掛けて習はざれば、上進しがたきと、碁と同じとなり。しかるに、初學文を書くには、兎角文字を餘計に取出して、書ならぶるを好めるも多し。此は書ならぶると

云ものにて、筋を立てるとは、相反するとなり。書ならべんと思へば、旁通多可にて、擇なし、擇なければ、筋は立たぬものなり。心得て慎むべきとなり。此は文章のみにあらず、詩作の稽古も同じとなり。

○世諺に好こそ物の上手なれといへると、尤なるとなり。好ければ自から心長く骨を折りて、其藝の上がる様に心掛る。心掛れば人の古より善とする所を捜し、究めて、次第に其を識るに至る。是を以て其藝はあがるものなり。下手は藝のいまだ成就せざるに、世に誇らんと思ふ心を先に立て、學ぶ故に、常に人の己を譽んことを好み、心短かく骨を折らず、人の古より善とする所を識らず。何事も己が身と心を以て矩に立て、後には卑近なる旁門に入り、喜ぶことになりて、一生やめざることなれば、上手になりたる人に較め視れば、後にいたりては、迥に劣れり。淺ましき淺智恵と云ものなるべし。余少年の時、笛を學びたりし頃、一老伶官ありて、余をば衆伶官の會集して合奏を習ふ中へつれ往て、其指授する所を共に聽かせ教へたるか、或日、其老伶が旁より、拍子を

撃ち居れる節奏のぐわひを、余心會得し悟りたる様に覺へて還りたり。其次日、往いて聽くに、老俗の拍子悪き様に聞てゆ。是はあるまじきことなりと思ひ、心を静めて聽けば、やはり余が拍子のあしきなり。人の善の得がたきと、何事にも斯類の多かるべし。少年の人は、猶更心得あるべきとなり。或人の、詩を余に見せ正を請たるに、其詩に片舟と云ふ文字あり。これは無きとなり、扁舟か片帆の設くなるべしとて、舟を帆と改めやりたれば、其人感謝して後、無き文字の片舟も、面白き處ある様なりと言て歸り去りぬ。人の善に服するとも、難きとなりと、其時始めて思ひ知れり。されども、斯人の如きは甚しと云ふべし。

○何事にも、骨を折らぬは下工なるべし。源應舉は當今の書名師なり。余嘗て往きて語りたる時、其家に鳩を蓄置きて其を觀て、書扁の鳩を書き居て語れるに、我程に心を盡して描象^{そく}んには、たとひ書を學びざる人も、描き得らるべしと思ふなりと云へり。余心に彼書は唯是の如きを以ての故に、日に進みて名手となりとなりと知れり。

文章に骨を折るべきとも、やはり同じ心得なるべし。

○文章と云ふ物を、初學の間にては、たゞ文學上の事なりとのみ思ふとなれども、是は一を知りて、二を知らざる故なり。初學の間にては、文字に熟練せざる故に、文字を付くる所のと艱難なれども、文章に長じては、何となりとも、文字の廻らぬとはなきものなり。其より以上は、巧なるものは、上手に言取り、拙なるものは、下手に言取るの差のみなり。さて其巧も拙も、心の巧拙にて、心到れば筆到り、心到らざれば筆到らず。茲を究竟して見るべし。文章と云ふものは、文字にあらすして、心の物を明かすの條理によるとなり。經藝に熟して物に博達なれば、其文も自然に明暢なり。物に博達ならざれば、心の惑言辭にうつる、故に辭理も自然に闇澁なり。是故に周人は胸中に物の條理の立ちたる所を指し、名付けて文といへり。周易に聖人の文を言ひ、周文王の文を言ひ、周語に晋悼公の文を稱し、論語に夫子の文章といへる類見るべし。○心の文の起りは象なり。象なるが故に文は言語をよせ合せて、其物象の條理を明かし

たるものなり。よせ合さざる言語は皆名なり。名とは乃ち象の符牒付なり。符牒付なる故に、國々にて、言語と名とは不同なり。符牒付とは、本邦にては、そらと云、漢人は天と云ふの類なり。象の符牒付とは、言語の上にては、正當にては名は入らざるものにて、名の入用は不正當の處のとなり。不正當なるを呼出すが名の用なり。故に名は人心に覺て居れる象をば、呼出して想はする爲の符牒付なり。言語文字の用は、究竟是の如きに過ぎるものなる故に、言語のつゞきたる所は、畢竟象をばよせ合せたるものなり。象をば寄せたるものとは、たとへば、松の木に菊の如き形の白き花咲きたりと言はんは、聞人心に松の木の象を設け、それに、白菊の花をよせ合せて想ふとなり。たとへば、友其僧還俗したりと言はんは、聞人、心に其僧の面貌形容の象を生し、それに外の俗体有髮の様子を取り合せて想ふとなり。是くの如く、よせ合せて出来たる言語をば文字にうつせるものなるが故に、文章の起りは象なりと言ふなり。右の如く象なる故に、其象の立ちかた明かならざれば文章の條理闡達になるなり。

て其闡達を致すの本は彼よせ合せを取り出す元象が符牒付にしかと乘ら無き故なり、元象のしかとのるときは、字義に精しからざれば出来ぬとなり。尤も助字に精しからざれば、たとへば客室を組立つるに、材木の製造の柄鑿牝牡正しからず。釘かすがひの柔軟にして、堅からざるが如し。正當に無名と云ふ文章を作すもの、工夫すべき第一の要義なり

○文章の物事を形容するに、とかく其類々を一つに打よせて書き取るべし。たとへば、人より書を我に贈りたるに、我其時にかく思ひ、其後又書を贈りたるに、我其時にかく思ひたりと云ふことを書んとせば、其人より書を兩度贈りたるに、我最初の時はかく思ひ、次の時にはかく思へり、書を贈りたる時は贈りたる類、思は思の類によせて書くべし。萬端の書かた、並に皆此心得を專とすべし。文に章段と云ふは、此通り心持にて、一事物の書き切々か章段になるとなり。さて章段と章段との大意のつゞけ様は、其末を承け承けすべからず。兎角其頭々へ見合せて書くべし。たとへば

幾端もあるにても、其頭々の處を以て、並べて貫く心持なり。未を承けくして長たらしく續合す心持にて作るべからず。綱目を以ていへば、綱は綱どにてつなくべし目に綱を承けて書くべからず。さて初學の人は、此章段の全旨を見取りて、此は是事を言たるとなりと、見すゆるとが危ふみありて出來ぬものなり。此くしりを見すゆるとが出來ねば、綱に綱を承けて書くとも出來ぬものなり。此を見すゆる法は、其辭の裏を心に立てし、權衡を設けて察するにあり。裏とは、たとへば天とあれば東、地とあれば西、行とあれば住の類なり。權衡のとは問學舉要に詳にせり。精しきとは口授にあらざれば盡しがたし。(淇園文訣)

作文秘訣 大尾

附 錄

● 填 字。

初に出せる文字を、文中に填めて一文となすなり。○は眞字、△は假字を填むる符號とす。答は後に在り。

一、博 物

天地、推究、博物學。

○○の間に生するもの、其數億のみならず、能△其理と○する學△○○○と云ふ。蓋し、四民共に知△△△可からざる所なり。

二、動 物

動物、餌食。

天地△間に在りて、意思△△て能く運動し、自ら○○を求めて生活する物を○○と云ふ。獸、鳥、虫、魚の如きこれなり。

三、植 物

根、葉、動、生物、植物。

○○とは、○と○とにて榮養を取り、自ら○くと能はざる○○なり。

四、虎

虎は、○色にして黒き斑紋あり、○食する猛獸なり。本邦△△産出せず、時々舶來せ△。

五、鳥。

鳥は、樹上又は水上等に○み、全身○にて被はれ、○△空中を飛ふ○○なり。

六、犬。

犬は、多く○○に養△れ、夜盗△防ぎ、又は狩獵△用に供せらる。性質○○にして、よく人に馴る。

七、猩々。

猩々は、○の一種なり。大さは、殆ど人体

ほど△△て、容貌醜し。多くボル子才等の熱○に産す。

八、石炭。

石炭は、其色○○△△△光澤あり、土中△△出づる一種の礦物なり。よく燃ゆる△爲めに、薪に○○せられて大○を爲す。本邦にては、九州及△北海道に多く産す。

九、輕氣球。

水素瓦斯を布の袋に盛り、其上昇する力に頼りて、人及び坐籠を中天に釣り騰るを○○○といふ。往年、佛蘭西と普魯

西と大戦争のありし時、○軍は、此器を用ひて城外に通信したりといふ。

十、通信法。

今日の○○法に。郵便電信電話△三法あり。又、一種△信號法あれ△△、これは、多く船舶等の間に用ひらるゝに過ぎず。

十一、船。

船とは、人又は貨物を○△△、水上を往來する具にて、其大小と名稱とは一樣ならず、随ッて其制も亦○○多し。軍艦商船漁船燈明船運漕船遊艇など、其用ひ道

によりて其稱を異にす。

十二、軍艦。

軍艦は、其築造高大にして、多くは○○を以て周圍を包み、敵弾を防ぐ備となす。大なるは、一萬餘噸に及ぶ。

十三、鐵。

鐵は、其産出する多し、其價至ッて○しき金屬なれども、其實用を足すとは、○○等の貴金屬も及ばず、鑄鐵鍛鐵鋼鐵等は、其用ひ道によりて製出を異にせる名なり。一國の、鐵△使用する○○にて其國の文明の度を測らるゝといふ。

十四、雪と墨。

雪の色は○△こと驚の如△、墨の色は○△こと鳥の如△。故に、雪の上の○は明に見得べけれども、○の雪の上に在るは見るに難し。

十五、學校。

學校は、人の人たる道と、百科の學とを教△て、完全なる人物を養成する屋舎なり。

十六、道に迷ふ。

道に迷△て之を樵夫に問△ば、樵夫も亦知らずと答△き。

十七、後悔。

幼時△學ばざれば、老△て悔△るも及ぶべからず。故に、幼時勉強△△、老後△悔無から△△△△ものなり。

十八、豈夫。

豈夫れと係りたる句は、△△△の反語にて結ぶべき規則なり。若し、豈夫れと係りて反語なき時は、かたわの句たることを免れざるなり。

十九、六憎。

六憎とて、憎む△△もの六つあり。その詞に、金持△△△△はと憎きはなく、書

二十一、紅葉。

歳時記に曰く、此月(十月)、山中には楓樹なと紅葉多△、その盛なる時節は、年により所によ△△遅速あり、氣候おそければ、十一月月上旬にも盛なる事あり。凡紅葉△、春花にもまさりてうるはし。閑暇あらば、遊賞すべし。龍田は、紅葉△名を得し所な△△、今は無し。初瀬高雄の紅葉△、吉野の花は劣る△△かは。



を見△△△物識顔するはと憎き△△△、人△物をやりて恩にさせる程憎き△△△、吝き△△△憎きはなく、愆ふかき程憎きはなく、人をそねむはと憎きは△△。

二十、巧藝。

三熊思孝は、京師鳴瀧村△人にし△、専ら好みて櫻花の寫生△なす。終に其眞を得△△。或人これをもとめ△裝潢し、壁上△掛おきたれ△、常に蝶きたり△これに舞△狂△け△となり。然らば、寫花といへども、眞△逼る時は、自然の香あるかもしらず。

用語集

○日本

帝國、亞細亞洲、位ス、綿亘七百
里、廣袤、四大島、美國、形、
蜻蛉の尾を啣むに似たり。

○日本三景

丹後の天橋立、安藝の嚴島、陸前の
松嶋、白砂青松、海上の廓廡、洲
嶼碁布、氷光と山色、

○琵琶湖

第一の大湖、入景の勝、周圍七十里
東西十里南北二十里、

○吉野山

大和、櫻花、春候、雲の如し、
香雪、遊人、一目千本、南朝の遺
跡、

○那智瀑

紀伊、瀑布、那智山、直下すると
百餘丈、文覺上人、驗行す。

○五港

函館、新潟、横濱、神戸、長崎、外國
と貿易す、本邦の最大港、横濱最も
繁榮す、外人の居留地、船橋林の如
し。

○富士山

駿河甲斐の兩國、本邦第一の高山、
直立一千四百餘丈、寶永四年の爆發、
四時雪を戴く、夏時登山する者多し。

○港

海水深し、山脈其三面を圍む、風浪
を避く、碇泊に適す、陸地斗出す。

○干潮 満潮

潮、汐、月、引力、時を差へず、

○光

萬物頼りて以て生育す。天地暗黒、
光源、太陽、燃焼、燐、鹹、
電、蟲、至要の者、

○温熱

育成、本源、太陽、地心、燃焼、
電氣、相擊、化合、

從順、天資、夙に興さ夜に寐ぬ、
歸省、看護して怠らず、純孝、哀傷、

○明君。

仁慈、大度、下を愛す、租を除く、
衣を脱ぎ寒を試む、學を好む、賢を
擧ぐ。

○義僕。

濃厚、誠實、精勤、未だ嘗て怨言
なし、勤續三十年、主人を敬す、

○忠臣。

一意、忠君の情、盡忠、身を忘る、
慷慨、奸臣を除く、逆賊を平く、

○賢婦。

貞操、粉粧を事とせず、内を治む、
閨門、兒孫を教ふ、夫に順ひ舅姑を
敬ふ、勤儉、厨事、裁縫、

○孝子。

○少年。

活潑、勉學、長者に譲る、遠きを
厭はずして通學す、賞を賜はる、惡衣
惡食を意とせず、孜々、文才、

價を二にせず、信用、得意、顧客、
店前常に市を成す、資本、豊富、唐

○兵卒。

射的絶妙、義膽、忠肝、擢てられ
て上等兵となる、器械体操、入營、
除隊、衆の模範たり、奮力あり、

○農夫。

辛苦を意とせず、月を載て歸る、星
を見て出づ、耕耘、種樹、收穫、
肥料、豊作、凶饑、貯蓄、牛馬、
菜圃、穀類、果實、強健、

○商人。

客に對して快澗なり、物貨を精選す、



●添 刪。

ここに、投書一二篇を掲げ、仔細に批評添刪して、作文の一助とせんとす。添刪は、勉めて原文に順ひて施すものなれば、之を以て、完全無疵の文とされるや否は、編者の保す所にあらずとす。讀者も、試みに、左の文につきてあしき點と善き點とを鑒別すべし。

○兵士。

萬國公法ありて列國相互間の關係を規定し、憲法法律ありて、吾人の權利を保全するを得ると雖とも、畢竟無事平和の時

の治法にして、戰國縱横の世には死法たるを免れざるなり。夫れ強大國の常として、弱小國を輕蔑し、正理に悖反し、公法を無視するは、往々見る所なれば、之に施す奈何。又法網嚴密なりと雖とも、暴威猛力を逞ふし、法律の制裁其効を奏せざる時は奈何。曰く兵力に訴ふるの法あるのみ。宜哉古來明君は、治に亂を忘れず、常に兵備を怠らざるを。抑も兵制は、各國其制を異にするも、皆國內の壯丁を募り、平時軍事を練習し、異日の變に備ふるものにして、國体を汚さず、

國民の生命財産を担保するの大本分は、此に存するものなれば、兵士の尊重すべき言を待たざるなり。

面して今の年少者は、他日皆兵役に服すべき義務を有する者なれば、深く國体の如何を思ひ、忠君愛國の氣象を貯へ置き丁年に到らば、陸に海に各好む所に從ひ兵士たるの本分を盡し、日東國の威名皇室の尊嚴日本兵士の名譽と、世界萬國に發揚せんことを期せよ。

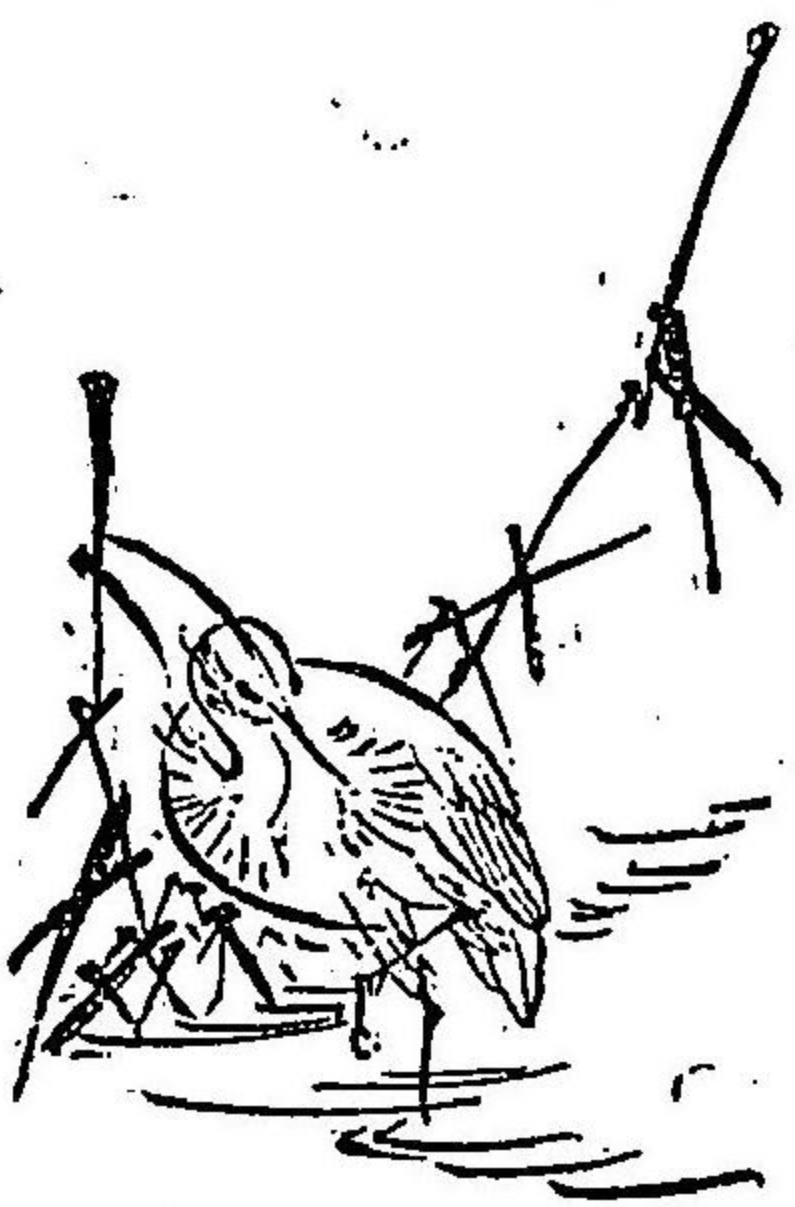
戰國縱横ハ、意義不完全ナリ、戰爭ノ國々横タテトハ何事ゾ。戰亂鼎沸、又

ハ虎狼噬呑ト改ム。之ニ施ス奈何モ、不完全ノ語ナリ、日常ノ言葉ニ譯シテ試ミヨ、自ラ語ヲ成サヅルヲ悟ラン。ヨリテ、カ、ル時ニ處スルノ術奈何ニ改ム。暴威猛力ハ、暴力ト改ム。時ハ奈何ヲ、時ハ又奈何ニスベキト改ム。氣象ハ、用水金錢等ト異リテ、貯ヘ置キトハ言フベカラズ、鍛鍊シト改ム。丁年ニ到ラバハアシ、到ルハ、ソコニ到着スルヲニテ穩ナラズ、故ニ、丁年ニ達スレバト改ム。其他、假名ノ不足ナルハ、小字ニテ

示スガ如シ。

此文、首メニ、外患ト内憂トヲ擧ゲ、兵力ニ訴フル一法アルノミニテ收メタル手際ハ可シ。

此文、鍛鍊ノ功ヲ積マズ、マ、批議スベキ章句アルハ惜ムベキモ、立意結構ハ可ナリト謂フニ足ル。



○机に倚て蛙を聞く記。

余が家田間に臨み、竹林以て之を掩ふ。一日、机に倚り、將に書を繙かんとして窓を開く。偶々思ふ、家貧にして事業の余暇なく、兼て資なければ文章を學ぶを得ず、而して、他の幸福兒を羨むと良久し。時に冷風颯々として來るあり、覺す天を仰げば、天油然として雲を作し、沛然として雨下る。倏ち聞く、群蛙哈々、齊しく鳴くを。其聲雨と和し、物を扣くが如し。爰に於て、心胸爲に爽快、前きの悲みを忘れて聽く。驚き見る、月已に

窓を射るを。少焉にして一陣の風燈火を滅す。時に夜將に半ならんとす。依て愛を割き寢に就く。

「余が家ハ田ニ臨ミ、竹林ニテ之ヲ圍メリ」ト改ム。一日ノ下ニ、午后等ノ字ナキ時ハ、後ニ至リテ、月ノ出デタルニ照應セズ。「事業」ヲ「業務」ト改メ、「余暇」ヲ「餘暇」ト改ム。余ノ字ハワレナリ。餘ト別ナリ。「兼テ資」ノ三字ヲ、「且ツ學資」トシ、「而シテ」ヲ「空シク」ト改ム。蛙ノ鳴クコロノ風ハ、冷風トイフベカラズ、涼風ナラン。又、颯々

ハ、秋風冬風ニ使フ語ニテ、春夏ノ風ニハ當ラヌ字ナリ。蛙聲ヲ「物ヲ扣く如シ」トハ、アシ、「樂ヲ奏スル如シ」トデモスベキカ。「驚キ見ル」ヨリ下ハ、一句一句切レ〜ニテ、甚ダ拙ナリ。如何ニモ、ハギ合セテ作りタル文ノ如シ。

コノ文ハ、假名使ヒヲ略シ、眞字ノ用方不適當ニテ、且ツ、偶々思フ何々、倏ち聞ク何々、驚キ見ル何々ナド、變化ニ乏シク、下下ノ作ナリ。

● 對句

漢文又は漢詩の中には、對句といふものあり。對句とは、二句の字を、一對になるやうにせしことなり。本邦の文學は、漢土の影響を受けたる多く、詩にも文にも、對句を用ひるとあり。假字交り文にて、其痕跡を留むるもの無きに非ざれば、讀書家は、對句の何物なるや位は知りおかざるべからず。然れども、作文中には、強て對句を用ひんとし、無用の字句を入れて華やかにするなどは、堅く禁すべし。左に、分り易きを主とし、平仄に

拘はらずして數例を擧ぐ。

地名對

淺草寺
小梅村

淺草寺に小梅村を對したるなり。第一の淺と小とは、物の大小多少深淺など數量に關したる字なり。第二の草と梅とは、共に草木の對なり。第三の寺と村とは、地理上の用語の對なり。かくの如く、一と一、二と二、三と三、悉く對を爲すのみならず、淺草寺といふ寺と、小梅村といふ實の村とあるとなれば、この對は、先づ巧みなる出來といふべし。

人名對

長髓彦 又は 豐國
白髮王 秀郷

長髓、白髮といへば、長と白とは共に形容詞にて、髓と髮とは、共に人体中のものなれば、第一の長白、第二の髓髮は、對を爲せり。又、第三の、彦も王も人倫中の名なり。故に、この對はよく出來たり。次の豐と秀と、國と郷との對も、之に準じて知るべし。

然れども、地名人名等の固有名詞は、妄りに改むるを能はざるものなれば、たとひ、一字一字對を成さずとも、さしつ

かへなく、人名と人名、地名と地名とへ

對すれば、よろしき例なり。故に、

淺草寺に 雨國橋を對し

長髓彦に 神武帝を對し 奉るもよし

と

せり。たゞ、巧妙なる絶作と云はるゝほどの句は、一字一字妙に對したるに限れり。

數量對 五風十雨 九月三日

五と九、十と三、共に數量の對なり。風と月、雨と日は、共に天文に屬する對な

對句

漢文又は漢詩の中には、對句といふものあり。對句とは、二句の字を、一對になるやうにせしことなり。本邦の文學は、漢士の影響を受けたる多く、詩にも文にも、對句を用ひるにあり。假字交り文にて、其痕跡を留むるもの無きに非ざれば、讀書家は、對句の何物なるや位は知りおかざるべからず。然れども、作文中に、強て對句を用ひんとし、無用の字句を入れて華やかにするなどは、堅く禁すべし。左に、分り易きを主とし、平仄に

拘はらずして數例を擧ぐ。

地名對

淺草寺 小梅村

淺草寺に小梅村を對したるなり。第一の淺と小とは、物の大小多少深淺など數量に關したる字なり。第二の草と梅とは、共に草木の對なり。第三の寺と村とは、地理上の用語の對なり。かくの如く、一と一、二と二、三と三、悉く對を爲すのみならず、淺草寺といふ寺と、小梅村といふ實の村とあるとなれば、この對は、先づ巧みなる出來といふべし。

人名對

長髓彦 又は 豐國
白髮王 秀郷

長髓、白髮といへば、長と白とは共に形容詞にて、髓と髮とは、共に人体中のものなれば、第一の長白、第二の髓髮は、對を爲せり。又、第三の、彦も王も人倫中の名なり。故に、この對はよく出來たり。次の豐と秀と、國と郷との對も、之に準じて知るべし。

然れども、地名人名等の固有名詞は、妄りに改むる能はざるものなれば、たとひ、一字一字對を成さずとも、さしつ

かへなく、人名と人名、地名と地名とへ對すれば、よろしき例なり。故に、

淺草寺に 雨國橋を對し
長髓彦に 神武帝を對し 奉るもよし

數量對

五風十雨 九月三日

五と九、十と三、共に數量の對なり。風と月、雨と日は、共に天文に屬する對な

り。
 事爲對 作文 晴耕
 賦詩 又は 雨讀
 作と賦、文と詩、晴と雨、耕と讀と相對せり。

植物對 百日紅 萬年青

百日紅と萬年青は、共に植物の名なれば、地名人名對と同じ。然るに、百日と萬年と對となれるは、更に妙なりとす。

動物對 駱駝 雁は去り 騾馬
 麒麟 燕は來る 蝸牛

駱駝と麒麟と、二字の動物にて、其字も、一は馬屬、一は鹿屬にて、よく對せり。雁と燕と對し、去と來と對し、騾馬と蝸牛と對せり。字毎に説かずとも、よく注意して讀まば、對句の味を悟るべし。古人の句、二三を出して次に示す。
 柳に氣力無くして條先づ動き、池に波文有りて 氷盡く開く。」
 氣霽れて風は新柳の髮を梳り、氷消れて波は舊苔の鬚を洗ふ。」
 三尺の劍先、氷、手に在り、一張の弓勢、月、心に當る。」

漢字は、天地日月等 物名などの字を實字、盡、開、焉、哉などの字を、虚字と稱す。對する時は、實字は實字に對し、虚字は虚字に對すると、右の三對にて明なるべし。

曾て、少國民雜誌にて、題を出し、對句と言はんよりは、寧ろ對字を募集したるにありしが、其成績中にて、見るに足るべき分を次に載す。題は、新井白石、日本橋、喫飯、黃菊の四語なりし。
 新井白石 日本橋 喫飯 黃菊
 廣瀬青村 支那船 嗜飲 紫蓼

次に、本邦の國名を對して數偶を擧ぐ

横山黃木	北上川	吸水	青松
高山清巖	天文臺	飲酒	紅梅
芥川丹丘	金字塔	吹煙	綠竹
廣瀬淡窗	雲井坂	飲酒	白蓮
長窪赤水	山下門	撒豆	紅葉

五畿 東海 蝦夷 河内
 九州 北陸 琉球 陸前
 和泉 參河 大和 遠江
 攝津 千島 伊賀 上野
 能登 日向 長門 若狹
 美作 北見 淡路 伯耆

飛彈	伊豆	山城	駿河
對馬	但馬	根室	出雲
加賀	陸中	下野	志摩
周防	日高	大隅	膽振
肥前	豊前	佐渡	武藏
豊後	肥後	讃岐	安房

○ 窓ニ合シ西嶺千秋、雪門ニ泊ル東吳萬里、船

● 假字の本字

平かなのいろはは、空海和尚の製作、片かなのアイウエオは、吉備大臣の製作と傳ふ。共に、本邦の文學上には、此上もなき便益を與へたるものにして、この二種の發明ありたればこそ、今日の文章も綴るなれ。もしこの發明なかりせば、字畫の繁くして六ヶしき漢字を用ひる外なかりしなり。今、平かな片かなの、本字を左に出す。へどつの二字は、古來諸説ありて定まらず。

○いろは本字。

いろはは皆、草體の漢字に基き、其筆畫を省きて創成せしものなり。次に出すいろはの、上なるは其本字にて、下なるは今日の假字なり。上なるを、又眞字假字とも萬葉假字ともいふ。

伊	呂	波
仁	保	邊
止	知	利
奴	留	遠
和	加	與
太	禮	曾
岡	禰	奈

良	武	宇
爲	乃	於
久	也	未
計	不	巳
江	天	安
左	幾	由
女	美	之
惠	比	毛
世	寸	
追	加	
者	子	耳
丹	保	邊

王。年。那。能。那。能。那。能。
 南。無。無。無。無。無。無。無。
 希。古。古。古。古。古。古。古。
 化。奈。奈。奈。奈。奈。奈。奈。
 可。佐。佐。佐。佐。佐。佐。佐。

八。二。保。保。保。保。保。保。
 邊。止。止。止。止。止。止。止。
 利。奴。奴。奴。奴。奴。奴。奴。
 乎。日。日。日。日。日。日。日。
 興。多。多。多。多。多。多。多。
 禮。禮。禮。禮。禮。禮。禮。

◎片假字イロ

ハ本字

これも、漢字の筆畫を省きて創成したると、平かなに同じ。

伊。呂。呂。呂。

い。は。は。は。は。は。は。は。
 め。か。か。か。か。か。か。か。
 ら。の。の。の。の。の。の。の。

會。子。子。子。子。子。子。子。
 圖。南。南。南。南。南。南。南。
 卒。良。良。良。良。良。良。良。
 宇。ウ。ウ。ウ。ウ。ウ。ウ。ウ。

井。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。
 於。久。久。久。久。久。久。久。
 也。未。未。未。未。未。未。未。
 个。不。不。不。不。不。不。不。
 工。江。江。江。江。江。江。江。
 亭。阿。阿。阿。阿。阿。阿。阿。
 草。幾。幾。幾。幾。幾。幾。幾。
 勇。女。女。女。女。女。女。女。
 三。之。之。之。之。之。之。之。
 比。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
 須。ス。ス。ス。ス。ス。ス。ス。

本版にて示す所のいろはり、空海の眞蹟

いろはにほへりぬる
 大回車
 空海

を摸して縮寫したるものにて、いはのはの字体の、今日のどや相違するもあり本字を知る

参考となるべし。かゝる筆意を、大師流といひて、近來まで行はれたり。大師は即ち空海の諡名弘法大師の略なり。

文學瑣談

文學に關したる名士の言行中、少年のため益あるべしと思はるゝ瑣談を、何れとなく左に列載す。故人を以て鑑とし、奮發あるべし。

○年齢と學問。

頼山陽が、江戸に出張中の父の許に詩をよせ、柴野栗山に賞せられたるは、歳僅に十三の時なり。佐藤一齋の、大學の解を著はして長崎の清國人に見せて賞揚されたるは、十八歳の時なり。安積良齊の

大名武鑑を暗じて回國六部を驚かせしは六歳の時なり。其他、一藝一技に名を得たる人々は、幼少よりすでに相當の修學ありて、漸く積みて大名譽をあげたるに非ざるはなし。日に月に進まざれば、老いて成る無き人となるべし。

○松平樂翁の歌。

松平樂翁公、ある日、侍臣四五人を召し、われ追ひかくる如く歌よむべければ、なるべく難題を撰び、代るゝ出すべしと仰す。やがて、侍臣共、題を出せば直に

詠じ、又出せば又詠じ、忽ち百五十題に及び、侍臣、題を出すに苦み、遅々するを、題は如何に如何にと促す。侍臣益困じて、題つき候と申せば、公とりあへず

きりて出す題のなければ言の葉の、花のつぎ穂はさく由もなしと詠せしとぞ。世皆、其速吟に驚かざるなし。

○田口文藏の左傳暗誦。

田口文藏佐渡にて生徒を教へける時、偶

門人の大坂より買入し左傳に落丁あり、門人大に憂へて之を文藏に語る。文藏曰く、われ之を補記して遣はさんとして、即ち筆をとりて一丁をそらにて書き足せり他日、他の門人の、左傳を買ひし時、之と相比べしに、本文は勿論、杜註に至るまで、一字の相違なかりしといふ。其精研強記なるを、驚くべきに非ずや。

○龜田鵬齋孫子を講ず。

これも佐渡にてのとなり。龜田鵬齋佐渡に遊びける時、時の奉行、その碩學なる

を聞き、禮召して孫子を講せしめき。鵬齋乃ち諸家の注を引き、可否を辨じ、滔々として説くと詳にして、一葉を了るに數時を費し、聴く者皆耳を傾け、其博學に驚かざるなし。講終り、鵬齋、見臺の書を收めずして退く。衆皆以爲らく、必ず細字を以て衆説を書き入れたる書ならん、就て之を見しに、何ぞ圖らん古びたる一冊の義太夫本なりしとぞ。其精研強記は、田口氏の左傳にも譲らず。學を爲す者は、何事も、かくまでに熱心して精一ならざるべからず。

○加茂真淵の奮激。
和學の大家加茂真淵、少き時、古學に志し、江戸に赴かんとす。時に、常々相親みし老人、相戒めて曰く、志は挫け易くして業は成り難きものなれば、余は子の思ひ立ちを危ふむと。真淵曰く、吾矢ッて輿馬に乗る身と爲り、錦を故郷に衣るべしと。老人笑ツて、輿馬に乗るは兎も角、其輿馬の御僕とならずんば幸なり。予この一言を餞別とせん。真淵常にこの言を服膺し、遂に大名を成せりとぞ。

○尾藤二洲の足。

尾藤二洲は良佐と稱し、もと伊豫の船頭の子なり。少き時、過ちて船よりおち、足を折りて蹙者と爲れり。良佐、營業に便ならざるを以て、自ら奮つて學者たらしむと欲し、大坂に出て、片山北海に従學し、又頼春水と講學し、遂に業成りて昌平齋の教官となり、蹙者なるを以て、官舎を賜はり、優遇せらる。昌平齋に官舎あるとこれより始る。世人、柴野彦輔、右賀彌助、尾藤良佐を、寛政の三助と稱す。

○書籍を購ふ。

太田蜀山人の妻、屋根の雨もるを修理すべき料を給はれといふに、蜀山答へて、われ近日御用にて長崎に旅行すべく、旅銀を數多請取るべし、故に予の歸府まで待つべしと。やがて、出發したれば、妻は其歸りをのみ待ち居たるに、蜀山還り來るを見れば、旅費の餘りは、悉く書籍を購ひ、また一片の金をも餘さず、屋漏も修理せずして止みたりといふ。讀書人は、書籍の價を吝むべきに非ず。一卷よめば一卷の益あり。

又、荻生徂徠翁、庫一つの書物の拂物ありしを聞き、己が家財を賣拂ひ、金六十兩にて求められしとあり。其中には、明の珍書數多ありしといへり。無用の骨董品を愛するなどに比すれば、同日の談にあらず。

○淺見安正の讀書法。

淺見安正は、山崎闇齋の高兄弟子なり。初め、其父、安正等三人に銀三十貫匁づゝを分かち與へ、各これにて好む所に身を立てよと遺言して歿せり。他の二人は、

商業を始めしが、安正は、人の上に立つは學問に如くものなしと志し、遂にかの三十貫匁の銀を書店に托し、吾要する程の書を遣はすべしと約し、又弟には、われ銀子殘らずを書林に托したれば、吾をこの樓上に居るを許せ、又、三食は、如何なる粗飯にても厭はざれば、犬に與へしと思ひて吾に與へよと請ひ、樓上に精讀すると三年にて、遂に身を學問に立てたり。

● 填字の答

左の順の如く、原文に填むべし。

- (一) 天地、く、推究、を博物學、らざる
- (二) の、あり、餌食、動物、
- (三) 植物、葉、根、動、生物、
- (四) 黄、肉、には、り、
- (五) 棲、羽毛、能く、動物、
- (六) 人家、は、を、の、伶俐、
- (七) 猿、あり、國、
- (八) 黒くして、より、が、代用、益、ひ、
- (九) 輕氣球、佛、
- (十) 通信、の、の、ども、
- (十一) 載せて、種類、
- (十二) 鐵板、

- (十三) 賤、金銀、を、多少又は數量
- (十四) 白き、く、黒き、し、鳥、鷺、
- (十五) へ、
- (十六) ひ、へ、へ、
- (十七) に、ら、ら、して、の、しむべき、
- (十八) らんや、
- (十九) べき、ふる、ずして、はなく、に、はなく、ほど、なし。
- (廿) の、て、を、たり、て、に、ば、て、ひ、ひ、る、に、
- (廿一) し、り、て、は、の、の、る、が、は、べき、

●戯に學徒に示す。

(三浦安貞 梅園拾葉)

- 一、學問は飯と心得べし。腹にあくが爲なり。かけ物などの様に、人に見せんずる爲にはあらず。
- 一、學文はくさ菜の様なり。とくとくさみをさらざれば用ひかたし。少し書を読めば少し學者くさし。餘計書を読めば餘計學者くさし。こまりものなり。
- 一、學文は置所によりて善悪わかる。臍の下よし。鼻の先悲し。
- 一、學文は輕業のやうにするがまし。輕業は人を目の下に見おろし、人の天衝をふひものなり。
- 一、衣裳うつくしくかざり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所体をなし、人に譽られんとするは歌舞戲のものなり。今の學者は、とふやら此眞似する様なり

附録 終

明治三十年十月三十日印刷
明治三十年十一月廿日發行

正價金拾五錢

東京市麹町區有樂町三丁目二番地

發行人 八木定太郎

東京市京橋區三十間堀一丁目二番地

印刷人 草田長松

東京市京橋區三十間堀二丁目一番地

印刷所 明教社

東京市京橋區鎗屋町十四番地

發行所 北隆館



版權 所有

作文叢書

發行の本旨。

作文叢書は、少年作文の座右の愛讀書たらんとを期し、作文一切の智識と、文を好む性情を養成せしめんとの微志なり。故に、毎巻、最も意を少年の教育に注ぎ、實用適切を以て、特色と爲し、世間普通の作文書と、大に其趣を異にせり。一冊毎に、美麗なる大家の新書を添へ、定價は十五錢郵税は二錢なり。略目次を左に出す。

第一 作文秘訣

既刊 金秋氏書

作文の秘訣を三十三章に大別して講ず

第二 十二ヶ月文範上

十一月發行 永興氏書

毎月々々の新題と其作例を示す
一月より六月まで七巻をす

第三 記事文範

十二月發行 廣業氏書

手本をすべき大家の作例數十編及び記事文の作法を説く

第四 形容語及故事

來年一月發行

第五 歷代國文選

第六 書牘文範

附業書電
信文例

第七 現今廿八大家文鈔

第八 十二ヶ月文範下

第九 遊記文範

第十 作文節用

◎以上十編完結の都合なれども時に前後するともある

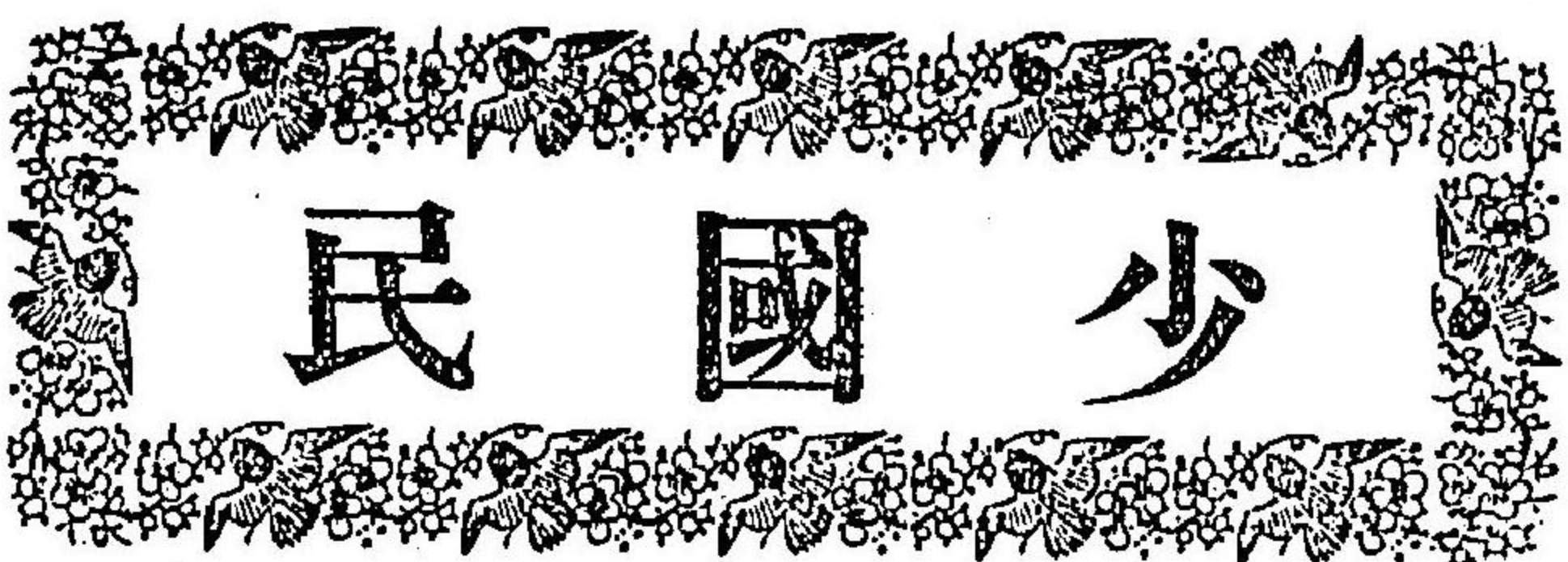
謹告

弊館は多年書籍新聞雜誌等の大取次大販賣を業とし來りしが幸に江湖の信用を得て漸次隆盛に赴けるを以て今春より出版部及び編輯部を増設し少年雜誌の霸王たる少國民の出版を引繼ぎこれと同時に少年俱樂部を發刊する事となせり爾來僅々十ヶ月を経たるに過ぎずと雖も其成績は實に驚くべきものありて益々擴張の必要を見るに至りたれば以後續々珍奇にして有益なる書籍を發兌せんとす作文叢書の如きは即ち其一着手にして未だ誇るに足らずと雖も購讀申込の總數はまさに一万を超んとするの勢あり以て弊館が他日讀書社會に歡迎せらるゝの前兆となすに足るを得べしこれ弊館が欣喜雀躍して顧客諸君に謝する所なり希くは倍舊の御愛顧を垂れ給はらんことを敢て謹告す

東京市京橋區鎗屋町十四番地

北隆館

明治三十年十月



少年國民

發行定期 一月二回 十五日

我少國民は逐號發行部数の増加を要し今や全く東洋に於ける少年雜誌界の覇權を獨占するの盛況に至りたれば今後着々改善を計りて益々我邦少年諸君の爲めに盡瘁せんことを期す諸君よ彼の無意無主義なる滑稽談の如きものを排斥して世の歡心を得んとする營利的雜誌と同視することなくんば幸甚なり最近發行第二十三號には淺野長政直諫の石版彩色刷、上野國妙義山、日本七温泉場、日本名橋集覽等の口繪あり記事に至りては何れも有趣有益ならざるなく其二を擧れば太華山人の『塗師はし』革庵主人の『火藥』玉壺樓主人の『秋燈夜話』骸華の『さびやり』桃軒の『世界の豪富六婦人』閑水の『漂洲内地の探險』秋知の『頼智和尚』三松の『亞米利加の虎』等にして笑林、互報、考物、文林、研究の結果等例に依りて賑はし

定價 一冊六錢半 半年六十七錢 一年一圓三十錢 郵税一冊一錢

東京市橋區鑪屋町十四番地

北 隆 館

少年俱樂部はこれ迄殆ど少國民と同一の程度なりしが同所にて同一程度の雜誌を發行するは徒に讀者の疑惑を招くのみにて更に實益なきことを認められたれば今回其程度を進めて中學校師範學校の學生等即ち中年者に適應の雜誌たらしめたり右に就ては自然掲載事項と題號と相違するの嫌あれば來年一月より改題の企あり今最近發行第十卷及び第十一卷の所載要目を擧ぐれば左の如し

見よ見よ 大々革新 少年俱樂部

定價 一冊六錢半 半年六十七錢 一年一圓三十錢 郵税一冊一錢

方山學園 正陸軍中將 學陸軍中將 紅之風俗	尾竹國親 小川一眞 小田一眞 小川一眞	修學旅行 科學小話 數理奇談 小	川村文芽 島田雪一 柴田雪一 柴田雪一	方孝孺傳 菊を見て感あり 從五位 從五位	海 堂
南の遊民 持論 日之過を聞くを喜ぶ 去來散風人	貴金兒 姑の目坊主 孝子幸太郎	傳	青木原居士 八木原居士 八木原居士	俗語通稱の變遷 醫學士	諸邊久 渡邊久 諸邊久
奢修論 明治今日の文章	中田島秋治 中田島秋治	史	高橋紫燕 高橋紫燕	無邪氣物語 醫學士	川村文芽 川村文芽
此他投書は其粹を抜き講論、雜誌、清談、美文、史談、圖論等の數欄に分載したり	猶本誌は興論の重んずべきを	少年議會	ことを召集す議員は種々の議題を提出する	詳細の規程は少國民第廿	三號及び本誌第十一卷に廣告せり就て見られよ

東海散士柴四朗先生著

佳人之奇遇

自第一編
至第八編

拾六册

和製

本

右全部出版取揃有之候に付御入用の向は欠本にならざる内至急御申込被下度候也
文科大學教授栗田寛先生著

常盤物語

全壹册

やまと綴
美本

定價金二十五錢
但郵税を要せず

本書は栗田先生が例の綿密なる思想と優麗なる筆を以て編述せられたるものなり
一葉の精巧なる寫真銅版と西山公の梅花の記、景山公の種梅記及浪華の記とを附録
せり苟も學界にあるものは何人を問はず必ず一書を座右に供へざるべからず
志賀矧川、三宅雪嶺先生等編纂

小絃集

全壹册

定價金三十錢
但郵税を要せず

本書の引に曰く英雄談乎、美人談乎、花鳥乎、風月乎、抑も亦政談横議乎と眞に然り
一章一節奇々妙々而して有益の文字世の青年及び少年たるもの一讀せば作文の料に資
するを得ん

北陸新聞

書籍部

當部は
發光亮と特約校
結ひ精々原價を
以て著者稿と文部仕候

雜誌部

當部は發行所と特約を結ひ
極々敏捷に諸雜誌を不取次仕候

新聞部

當部は本社と精勤を結ひ各新聞
の發送を爲し迅速に取扱申候

編輯部

當部は少年俱樂部部作支
業事以て專ら編輯の業に從事仕候

出版部

當部は少年國民少年俱樂部
部作文叢書を此の
種々出版の業に
從事仕候